
IS <インフィニット・ストラトス> Deus Ex Machina

ネコのしっぽ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS<インフィニット・ストラトス> Deus Ex Mac
hina

【Nコード】

N5613X

【作者名】

ネコのしっぽ

【あらすじ】

ISと呼ばれる兵器の登場により、世界のミリタリーバランスが崩壊した現在。国家群は『威信と反映』『利権と保身』を掛けた、際限無い軍備競争を繰り広げられていた。

一歩一歩緩やかに『破滅』へ向かう世界の中で、男で始めてISを動かした少年『織斑一夏』は、ある赤いISを身に纏った少女と出会う。

それは魔女との遭遇か、それとも女神との謁見か。果たして、その少女は少年に何を齎すのか。

赤と白が邂逅する時、この物語は始まる。

この小説は、IS＜インフィニット・ストラトス＞の二次小説です。また、原作に足りない部分を補完する意味で、オリジナル設定や自己解釈が多々存在します。

初投稿なので、いたらない点も多々あると思いますが、よろしくお願ひします。

第0話 序章 Prologue (前書き)

作者は小説書きとして未熟な上、文才もなく、政治にも軍事にも詳しくありません。

出てくる軍事用語や組織などは、ほぼ『知ったか』でございます。なので、それを踏まえてご覧になっていただけると助かります。

第0話 序章 Prologue

<デウス・エクス・マキナ>と呼ばれる組織がある。

この組織の創立を語るには、ISと呼ばれる兵器とそれが齎した世界情勢について語らなければならない。

IS。正式名称<インフイニット・ストラトス>。

稀代の天才『篠ノ之束』博士によって開発された超高性能マルチフォーム・スーツの総称である。

このISは、戦闘機に勝る機動性を有し、戦車に勝る防御力を誇る。その戦闘能力は高々一機で大隊を屠り、小隊を結成すれば国すら滅ぼせる代物であった。

そんな馬鹿げた兵器の登場により世界のミリタリーバランスが崩壊。今まであった軍隊の価値観は一変した。

この未曾有の事態に対し、世界はISについて協議する場『国際IS委員会』を設け、次にISの運用や開発を規制する条約『アラスカ条約』を制定した。

この条約により、ISの戦争への導入が禁止され、ISはスポーツへと はたして兵器同士の争いがスポーツと呼べるかは別として そのベクトルを変えていった。

これにより事態は収束に向かっていったのだが、それは表面上の話。

水面下では、限りあるIS 某事情によりISは467基しか存在しない の所有権を巡って、国家たちが激しい冷戦を繰り広げていたのである。

それもそのはず。ISには世界のパワーバランスを変えるだけの力がある。だから、どこの国もIS獲得に躍起になったのだ。ある国は軍事的優位性を維持するため、ある国は強国へと返り咲くため、ある国は威信と繁栄のために。

それぞれの国家がそれぞれの思惑を抱える中、越えてはいけないう線を越えてしまったのは、軍事大国アメリカだった。

彼らは 『世界の警察たる我々合衆国は世界秩序を守護する者として、最も多くのISを所有する必要がある。それを拒むものは秩序を乱す悪と見做し、場合によっては武力を行使する』 と過激な主張を行い、あるう事が国際世論の批判を払い除け、各国に軍事的圧力をかけたのだ。

冷戦から一変、この世界大戦の危機に、世界は否応なしにアメリカの要求を受け入れた。結果、アメリカは150以上のISを獲得したのである。

これにより、世は名実共にアメリカ中心の世界と化したのだが、同時に中東を始めとした各国の反米意識が高まり、世界情勢も悪化。欧州連合は武力国家『アメリカ』に対抗する策として、ISを主力にした統合防衛計画『イグニッション・プラン』を発案し、中国とロシアという共産諸国は手を結ぶことで軍備増強を図った。

やがて、世界の規範たる大国が軍拡に奔った事により『力こそ正義』という武力主義が主流化し、まるで籠が外れたように世界規模の軍

備競争が始まったのである。

そして、それらは留まることなく、今も激化の一途を辿っている。

こうして世界は、戦争の火種を燻り続けるだけの混沌とした時代へと突入したのである。

当然、その行く末を危惧する者達が現れた。

そんな彼らによって創立されたのが、『時の氏神』を意味する組織<デオス・エクス・マキナ>である。

この組織はどここの国家、宗教、民族にも帰属しない。故に愛国心や信仰心を持たず、己の利益の為にも戦わない。

ただ、彼らは肥大化する軍事力を牽制する抑止力として存在し、世界保全のために戦う。

具体的な活動は多岐に渡り、ある時は国家の暴走を止める抑止力となり、ある時は不穏な行動を見せるテロ組織を抑圧する。またある時は闇市場ブラックマーケットに流失したISやその機密がならず者に渡らないよう暗躍する、など様々。

場合によってはISによる武力介入も辞さないという過激派で、曰く『正義の使者』『独善的な偽善者集団』『秩序の番犬』などと揶揄された。

規模、資金源、技術力などの詳細については、一切不明。点と点を結んだだけの組織とも言われ、そもそも実体があるのかさえ分からなかった。

故に彼らの名が世間に知れ渡る事はなく、ただ闇深く、深遠の淵に存在し続けたのである。

そして、この物語の軸となる少女『アリス・リデル』は、そんな組織に属する一人であった。

私ことアリス・リデルは上司の呼出しを受け、狭い通路を一人歩いていた。

「ふはあ〜……」

私は眠気眼を擦りながら、手櫛で寝癖を整える。実は眠りの真只中に呼び出しを受けたのだ。まったくこういう職についていると、夜も昼も関係なく呼び出されるから敵わない。

さて愚痴るのもここまでにして。目的地まで少し時間が掛かるので、私の自己紹介でもしましょうか。

私はアリス・リデル。所属している組織に明確な階級がないので、ただのアリス・リデルです。

歳は今年で16。組織内では、主にISの操縦を担っています。特技はピアノと破壊^{サボタージュ}工作。趣味はアニメ観賞。

容姿は紅髪碧眼。紅髪は高飛車でワガママなんて言われますけど、別にそんな事はないですよ。たぶん。

スリーサイズは、えっと……残念ですが、目的地に到着したようなので自己紹介はここで終わりにしますね。

私は目的地である部屋の前に立ち、二回ノックしてから返事を待つ。

『どうぞ』と返ってきたので、ドアノブを回した。

「失礼します」

室内に入ると、銀髪の美しい女性が出迎えてくれた。

気品に溢れた佇まいと優しそうな雰囲気。譬えるならその姿は、御伽噺きはなしに出てくる王女様のよう。現代には珍しいタイプの美女だ。名前はロリーナ。歳は確か24か5。落ち着きと美貌に定評のある私の上司だ。

「ごめんなさいね、急に呼び出して。さあ掛けて」

彼女が椅子へ座るよう促す。私は勧められるがまま、ソファアに腰を下ろした。

「貴女を呼んだのは、他でもないの。貴女に頼みたい事があってね」

「なんででしょうか？」

そう受け答えすると、彼女はガラス張りのアンティークテーブルにある資料を広げた。

私はその一つを手に取り、覗き込む。いくつかの写真と文面が目に入った。どうやら何かのパンフレットらしい。

「IS学園？」

と、表紙にはそう書かれていた。

IS学園といえば、IS運用協定 通称『アラスカ条約』に基づいて設立されたIS技術者育成の学校だ。

そのパンフレットを渡して、私にどうさせようというのだろう。まさかとは思いますが。

「実は貴女にココへ転入してもらいたいの」

彼女は淹れた紅茶を私に差し出しながら、そう言う。予感は見事な中した。

「貴女も知つての通り、ISに関連する人材はほぼこの学園で育成されるわ。いわば、ISの登竜門ね。また『どの国家にも干渉されない』という特性上、ISの試験運用場としても使用されているわ。だから、IS学園には各国自慢の最新鋭機とそれを駆る優秀な操縦者が一斉に集うの」

彼女はゆったりとした動作で紅茶に角砂糖を入れ、かき混ぜながら続ける。

「そこで貴女にはココへ入学してもらって、その情報を私たちにリクしてもらいたいの」

「つまり密偵というわけですか？」

「そうね。引き受けてくれるかしら？」

「わかりました」

私は紅茶を一口啜り、了解する。

彼女は“頼み事”と言っているが、実質の任務依頼なので断る事はできない。それにIS学園には前から興味があったので、喜んで承諾した。

しかし、ただ一つ腑に落ちない点がある。

「でも、本来こういつた任務は<情報部>の仕事なのでは？」

私が所属する組織<デオス・エクス・マキナ>は、『情報部』『作戦部』『技術部』の三部門で構成されている。その内、偵察や諜報といった情報収集を行うのが『情報部』の仕事で、その部署から得られた情報を基に作戦を実行するのが、私の所属する『作戦部』である。なので、密偵といった任務が私に回されてくる事は珍しい。

「今はこの部署も人手不足だから。情報部も人員を割けないでいるのよ」

「なるほど。だから、作戦部にこのような依頼が」

「そういう事」

私は納得した顔で、もう一口紅茶を啜る。

人手不足なら仕方が無い。月並みの言葉だが、困ったときは助け合いが肝心だ。

「入学手続きはコチラでしておくわね。表の名目は<アトラス>の

推薦という事しておくから、そのつもりで」

<アトラス>とは、組織がその存在を隠匿する為に作り出したダミー会社、いわゆる隠れ蓑の一つだ。

<デオス・エクス・マキナ>はこういつた偽会社をいくつも抱えており、それらを通じて人材などを集めている。ちなみに<アトラス>の表向きは、ISの操縦や開発のコンサルティングを行う会社だ。

「あと<赤騎士>も持つて行ってかまわないわ」

赤騎士。この組織が所有するISにして、私の専用機の名だ。

IS時代の始まりを告げた機体『白騎士』の名を肖り、赤騎士と名付けられたそうだ。

6ヶ月前にロールアウトしたばかりなのだが、既に『二次形態』セカンドフォームを終え、『単一仕様能力』ワンオフ アビリティも開花済み。

私、凄いでしょ、えっへん……と言いたところだが、本当に凄いの、開発者である目の前の女性だ。

ロリーナは篠ノ之束に次ぐ天才と言われた女性で、ISの<コア>を独自で解析したらしい。厳密にいうと解析率72%だそうだが。

それでも凄い事ですよ。世界中の頭脳を以つてしても解析できなかった<ブラックボックス>を一人で解き明かしたのですから。おまけに美人でスタイルまでいいなんて、神様に愛されすぎです。

「そんなに褒めないで」

今じゃ私の心中までお見通しですからね、恐れ入ります。

「そうそう、アリス。〈赤騎士〉を持って行くのはいいけど、人前での使用は控えてね。〈赤騎士〉の〈コア〉はこのお国にも登録されていないから。もし委員会に目をつけられたら、密偵として動き辛くなるどころか、貴女自身の身柄も危うくなるわ」

ISは数に限りがある上、軍事力を左右する性能を有している。その為、国家間の保有数や所属について厳しい取り決めが成されている。

そんな状況下で無所属のISを露見させれば、所有者である私も当然、国際IS委員会の拘束を受けるハメになる。

もちろん、組織について口を割るつもりはないし、組織が機密保持の為、私を切り捨てても文句はない。

だが、最新鋭機の〈赤騎士〉を押収されるのは痛手だ。あれには多額の費用とオーバートテクノロジーの粋がすぎ込まれている。使用には細心の注意を払わないといけないだろう。

「委員会幹部には私たちの支持者も多スポンサーいから、最悪根回しは可能だけど、面倒事は無いにかざるわ」

「了解です」

「一応〈コア〉のダミー国籍を用意するつもりだけど、偽装工作にまだ時間が掛かりそうだから、詳しい事は後日連絡するわね。あとは……………えっと、これね、これ」

そう言ってドン！！と出される六法全書のような分厚い本。え、何です？電話帳ですか？

そんな私を尻目に、ロリーナはこれでもかと次々に分厚い本を繰り

出してくる。その数なんと3冊。

「これらは学園認定のISマニュアルよ。ISの運用方法から各システムの解説、国際条約なんか惜しみなく記載されているわ。入学までに必読しておかないといけならしいから、がんばって読んでおいてね」

IS周りには画期的なシステム、理論、技術などがふんだんに詰め込まれている。それらを解説し要約すれば、これぐらいの量になるのだろう。必要な知識とはいえ、この厚さだと気が滅入りますね。

私はその内の一冊を手に取り、パラパラと適当にページを開く。すると飛び込んできたのは、気が遠くなるような専門用語の羅列だった。これには思わず、呻いてしまう。

「そんなに気を落とさないで。私も読んだけど、簡単な事ばかりでスラスラ読めたわよ？」

「それはきつと貴女だけです」

私は断言した。この人、難解な量子力学の本を予備知識なしで読破したんですよ。そんな人に『スラスラ』と言われても説得力ありません。

とはいえ、私も伊達にISの操縦兵をやっているわけではありませんせんから、読破する自信が無いわけじゃないですけど。

「まあ、このままだと持ち運ぶのも大変だし、電子書籍化してから貴女のモバイル端末に送っておくわね」

「最初からそうしてください。こんなものをいきなり見せられたら心臓に悪いです」

「ふふふ、なら大成功だね。私、貴女をびっくりさせたかったの」

彼女はこういう性格なのである。いつも私をからかっては楽しそうに笑うのだ。

天才と馬鹿は紙一重というが、本当にそうかもしれない。彼女を見ているとつくづくそう思う。

そして、私はIS学園のパンフレットを持ち、ロリーナに一礼してから部屋を出た。

その後、パンフレットに目を通しながら、来た道とは違う方向へ向かう。

「ふむふむ。学園は全寮制なのですか」

しかも、設備は高級ホテルのスイートルーム並み。おまけに学食まで完備とは、さすが国立。

「あっ、制服可愛いですね。なにに？制服は改造OKなのですか。へえ、いいですね」

私はどういふ風にカスタマイズしよう。フリル？それともミニ？うん、迷う。

私は学園生活の妄想に花を咲かせながら、相棒の待つISの整備ドックへ向かった。

ISドックは地下に設置されている為、私はエレベーターを経由して地下へと下った。

狭い箱の中でしばらく待機し、B3という表示を確認してからエレベーターを降りる。

そこから少し歩くと、赤いISが片膝を着き、鎮座しているのが見えた。

纏う装甲は滑らかでありながらも剣呑。携えた二本の大剣と楯が機体の英姿を助長している。

その光景はまさに『姫に忠義を捧げる騎士』。さながら中世へタイムスリップしたような錯覚に囚われる。

そばに居た研究員の女性に声を掛け、搭乗許可を貰うと、私は<赤騎士>に乗り込んだ。

「DEM-cdl:No002アリス・リデル」

私がそう呼びかけると、<赤騎士>が呼吸し、私が私であるかを確認かめ始める。

<赤騎士>は生体認証バイオメトリックスによってロックされている。起動には私のバイタルサイン、つまり生体情報が必要不可欠。

声紋認証から始まり、指紋認証、網膜認証、静脈認証と次々認証が行われていく。呼びかけてから約0.5秒後、“彼女”が喋った。

《Hello My honey(こんにちは、私の愛しいアリス)》

》

オペラ歌手のような澄んだ声で、そう喋りかけてきたのは<赤騎士>に搭載されている人工知能だ。

正式名称は、量子制御型ニューロAI『赤の女王』。コールサインおよび起動コールは<レッドクイーン>。

そして、この<レッドクイーン>こそが、<赤騎士>最大の特徴なのだ。

この<レッドクイーン>はISの<コア>とリンクしており、シンクロ同調状態にある。そんな彼女と対話を重ねる事で、操縦者の意思を<コア>の深層にある『ISの意思』へとダイレクトに反映させる事ができる。

結果、ISと搭乗者は相互理解を深める事ができ、ISとの相性が頂点に達したとき発現する能力『ワンオフ単一仕様能力アビリティ』を高い確立で開花させられるのだ。

つまり、<赤騎士>は『インストー単一仕様能力』の発現を主眼に開発された機体なのである。

武装には、大型の高周波バスターブレイド《ヴォーパル》が二本とイギリスの技術を応用したソード型ビット《シュナイダー》が10機。以上が“彼女”の初期武装。ライフルなどの火器は一切積んでいない。

バスター拡張領域は空いているのでインストー量子変換して追加する事は可能なのだが、開発者の意向で無理に拡張領域を空けてあるそうだ。曰く、現在開発中の専用装備の為だとか。

ちなみに、今の<赤騎士>は第一次形態だ。この機体は『第一次形態』と『第二次形態』を切り替えられるのである。

閑話休題。“彼女”の紹介はこのぐらいにして、話を戻そう。

「<レッドクイーン>、実は今度IS学園に入学する事になりましたね。それで貴女にIS学園に関する資料や情報を集めてほしいのです。お願いできますか？」

《Yes My honey 御心のままに》

私がそう言うと、<レッドクイーン>がインターネットに接続して、IS学園関連の情報をかき集め始めた。

続々と開示される情報群には、一般的なものから極秘扱いされているものまで多種多彩。その中で興味深いものを見つけた私は、表示された3Dウィンドウを拡大した。

「教師名簿？」

それはIS学園に勤務する教師の一覧であった。

「織斑千冬！」

名簿内に著名な人物の名を見つけ、私は声を上げた。

織斑千冬。ISに関わるものなら、この名を知らない者はまずいないだろう。

彼女は最強のIS操縦者として名高い。現役時代は無敗を誇り、IS世界大会<モンド・グロツソ>では、格闘技部門と総合部門で優

勝を果たした。以来、人は敬意を以って、彼女を<ブリュンヒルデ>と呼ぶ。

すると、<レッドクイーン>が私の好奇心を汲み取って、<織斑千冬>で検索を始めた。

すると、出てくる、出てくる。彼女の強さを説いた解説資料や現役時代使っていたIS<暮桜>のスペックデータ。中には千冬信者による非公式ファンサイトらしきものや、盗撮と思われる画像や動画まであった。

「現役を引退しても、この人気ぶり。凄いものですね。かくいう私も懂れてはいますけど」

それはさて置き、現役を引退した彼女がIS学園に勤務していたとは……。

でも、彼女ほどの技量があれば、IS学園に招かれて当然か。むしろ居ない方が不自然。

「あの織斑千冬に会えるのですか。これでまた一つIS学園に行く楽しみが増えましたね。では、レッドクイーン。あとで閲覧しますので、主要なファイルだけを抽出して、私個人のモバイル端末に転送しておいてください」

《Yes My honey ところで私への同行許可は?》

「もちろん、下りていますよ。ただしIS学園では貴女おあやけの存在を公にできません。だから、設備があってもメンテナンスを受けないので、当日までに各システムと武装、PIC、ハイパーセンサー、非固定浮遊部位などのチェックを念入りしておいてください。も

し不備や必要なパーツがあつたらロリーナに「

《Yes My honey さっそく旅支度を始める》

言葉が終わるより早く、各部のチェックを行い、点検項目を消費し始める<レッドクイーン>。

せつせと旅の準備を進めるその様子は、まるで『遠足前の小学生』みたいだ。

「じゃあ、私はそろそろ行きますから。おやすみなさい、レッドクイーン」

《Yes My honey よい夜を》

そして、私は赤騎士に別れを告げ、自室へ向かう。さて、今から制服のカスタマイズ案を作成しないと。

第0話 序章 Prologue (後書き)

どうも、はじめまして。この文章を書いた者です。

今回は初めてのあとがきという事なので、ちょっと多めにあれやこれやを書きたいと思います。どうかご了承を。

それではまず、世界観といいますか世界情勢について。

この世界では、各国がISを主力にした破滅的な軍備競争に勤しんでおります。そのせいで国家間に軋轢が生まれていて、原作よりちよつとヤバメな状態です。そして、お決まりのように、その背後にはこれらを演出、促進する輩がいて……

次にオリジナルの組織<デオス・エクス・マキナ>ですが、『機動戦士ガンダム00』のCBをモチーフにしています。活動スタンスも同様です。ただし劇場版のCBをモチーフにしていますので、派手な武力介入はしません。

最後にオリジナル主人公『アリス』について。

最初は、定番のダブル男主人公にしようと思っていました。それで片割れをどんなキャラにするか悩んでいると、神様が言ったのです。

『オリジナル主人公を女の子にして、百合展開にしちゃえばいいじゃない。むふふ』

どうやら、神様はそつち系がお好きなようです。

ええ、これは神様が言ったのです。けっして私ではありません。違
うったら違うのです。

でも、一応、主人公として『一夏』もいる事だし、片方ではハーレ
ムを作つてよろしくやって、片方では禁断のあれやこれやをやる。
そういうのもいいかなと。そんなこんなで、誕生したのがこの主
人公です。

まあ、正直、私自身も今だタブーを犯した感が拭えていません。こ
の女主人公が吉と出るか凶と出るか、わかりません。ダメならギア
をバツクに入れて、全力後退するのみです

最後に、ここまで読んでくださった方。本当にありがとうございます。
す。

もしご意見やご感想などを頂けたら、私はきつとうれしくて小躍り
してしまう事でしょう。

では、大変長くなりましたが、どうぞよろしく願います。

第1話 入学前夜 Previous night (前書き)

『娘(むすめ)』の読み方は『こ』でお願いします

第1話 入学前夜 Previous night

夕焼け空が夜へと化けていく時間帯。私は任務遂行のため、IS学園の最寄り駅へ向かう電車の中に居た。

本来なら昼前に到着するつもりだったが、初めての日本カルチャーに気を取られ　もとい、はしゃぎ過ぎてしまい　気づいたら、こんな時間になってしまっていた。

言い訳がましいかもしれないが、私は花も恥らう十五歳の乙女。オシャレなブティックや珍しい喫茶店があれば、フラフラと立ち寄ってしまう訳で……

そんなこんなで、IS学園行きの電車に乗り込んだ時には、午前7時を過ぎていた。

まあ、何もなければ、学園の門が閉まるまでに到着できるだろうから、特に問題はないだろう。

ちなみに、今私が乗っている車両は男子禁制の女性専用車両だ。さすがIS発祥の地だけはある、二本に一本がこの車両だった。これが女性優遇社会　女尊男卑の一片だという訳だ。

女尊男卑と女性優遇制度。

ISは革命的な兵器であったが、一つ大きな欠陥を抱えていた。それが『女性にしか扱えない』というモノだ。

その事によりISを使える女性の社会的地位が上がり、公共福祉、社会制度、法律、何に置いても優遇されるようになった。これが世

間一般で言われる『女性優遇制度』だ。

しかし、この制度の導入が社会の歯車を狂わし始めた。

この行き過ぎとも言える優遇制度によって、女性の発言力が強くなりすぎ、彼女たちの権力が肥大化。

それに反比例するように、男性の社会的地位が女性権力に押し潰される形で、どんどん失墜していった。

こうして出来上がったのが、女は尊重され、男は卑しまれる社会

女尊男卑だ。

今では『男女平等』など過去の遺物。ISが使えない男は蔑視され、女性の私腹を肥やすための労働力。さながら、女王アリに仕える働きアリのような扱いを受けている。

無論、この差別社会に対して異論を唱える者もいた。しかし、いつの時代もそうであるように、弱者が権力者に楯突くと、その口に権力という名のマスタードをたんまり放り込まれるのだ。そうになると、もう何も言えなくなる。黙殺されるのだ。

結局、女性優遇制度が導入されてからの10年間。男性たちは窮屈で息苦しい生活を強いられ続けてきた。

しかし、数ヶ月前、そんな男性たちに一筋の光明が差し込んだのである。

(織斑一夏)

私は車内の広告ディスプレイに表示された少年の名を口にする。

彼は『世界で初めてISを動かした男』として世間を賑わかせている人物だ。彼の登場で、良い意味でも悪い意味でも世界は荒れている。

もし彼とISの因果関係が解明され、男性がIS世界に参入できるようになれば、『女性優遇制度』はその存在意義が失われ、きつと廃止される。『女尊男卑』という社会も音を立てて瓦解する事だろう。そうなるなら『男性たちが雄々しく輝ける社会』が帰ってくるのは必然的。まさに世の男性にとって『織斑一夏』は救世主と言えるだろう。

そして当然、私が所属する組織<デウス・エクス・マキナ>もIS適正を持つ彼に一目置いている。

だから、上司のロリーナが、私にこんな事を言っていた。

『彼は組織に必要な人材かもしれないから、口説いてモノにしてきてくれないかしら?』と。

ふう。奥手な私にそんな高等な事ができる訳ないでしょ。話しかけるだけで手一杯です。

まったく、そういう色仕掛けは大人の色気を漂わせる彼女がすべき

ですよ。話によれば、投げキッスだけで男がハイエナのように群がってくるとか。織斑一夏がどのような男性か知りませんが、彼女の色香ならイチコロでしょう。

その時、モバイル端末に一通のEメールが届いた。

<私が未成年の少年に手出したら、犯罪だもん？>

開くと、文面にはそう記されていた。

私は焦った様子で周囲を見回すが、当然彼女の姿はない。

彼女が読心術に長けている事は知っていましたが、まさか極東にいる人間の心まで読むとは……。

これには感心を通り越して恐怖を覚えますね。と、とにかく落ち着くために、素数を数えましょう。

0、1、1、2、3、5、8、13、21、34、55、89。

その時またメール。

<アリス、それ素数じゃない、フィボナッチ数列よ。動揺している

の？>

してますよ。貴女のせいだね。

結局、私は駅に着くまでの間、ずっと心のスイッチをOFFにし続けた。神様、プライベートって何ですか？

駅到着後、迎えはないとの事なので、私は徒歩でIS学園へ向かう。

「それにしても<イノベーター>みたいな上司の所為で、どっと疲れましたね。早くベッドで横になりたいです」

そんな事を思いながらIS学園の校門を潜ると、一人の少女が何かの施設を覗き見しているのが見えた。

その少女はIS学園の制服を着込み、黄色いリボンで髪をツインテールにしていた。更に肩からその小柄な体に似合わない大きなボストンバックをぶら下げている。

という事は、彼女も私と同じIS学園の編入者なのでしょうか。ちよっと声を掛けてみましょう。

「すみません。何を覗いているのでしょうか？」

私が呼びかけると、彼女はビクッと肩を躍らせた。なんか、ネコみたいな反応ですね。

「え！？ああ、これは……」

私を教員だと思ったのか（今は私服なので）、アタフタしだす少女。私は動揺する彼女のスキをついて、施設の内部を覗き込んだ。施設内は砂と岩ばかりで、随分と殺風景な場所だった。どうやらここはIS用のアリーナらしい。

その中で二人の男女が何やら雑談をしていた。盗み聞きはよくないですけど、ちょっと耳を傾けてみましょうか。

「いつになったらイメージを掴めるのだ。先週からずっと同じところで詰まっているぞ」

「あのなあ、お前の説明が独特すぎるんだよ。なんだよ『くいつて感じ』って」

「だから、くいつて感じた」

どうやら男子生徒が女子生徒に指導を給わっているらしい。

でも、会話の内容から察するに、うまくいっていないようだ。

（あの男の子は……）

ISを教わる男子。その人物には見覚えがあった。彼は確か『世界で初めてISを動かした男』織斑一夏だ。

(もう片方は……)

さすがにこちらには見覚えがなかった。いや、正確には見たことある気もするのだが、思い出す事ができない。これでも記憶力は良い方なのだが……

ともあれ、私は考えるのを後回しにして、例の少女へと向き直った。

「ふふ。なるほど。気になる男の子を遠くからこっそり盗み見ていたのですね?」

「ち、違うわよ。別にあんなやつ事なんか誰も見てないわよ!？」

私が冗談を口にすると、彼女はムキになって激昂してきた。でも、ネコが怒っているようでまるで怖くない。

でもまあ、東洋人は顔に出ないといいますが、嘘ですね。彼女の顔、真っ赤ですもの。

「ところで、あんた誰よ!？」

「あ、申し遅れました。私は今日付けでここに転入してきましたアリス・リデルと言います。貴女は?」

「な、何であんたなんか名前を教えないといけないのよっ!！」

うっん。どうやら気になる男の子が異性と親しげにしていた所為で、虫の居所が悪いらしい。

「そうですか。名乗ってもらえないなら、仕方ありません。ツンデ

レさんとお呼びしますね？」

私がまた冗談を言うと、彼女は掛けていたポストンバックを振り上げた。投擲の構えだ。

「あたしをおちよくってんの？」

投げられては堪らないので、私は両手を挙げて白旗を振る。

「すみません。そんなつもりはないのです。でも、名前を教えてくださいないと、どう呼んでいいのか」

「わかったわよ。教えりゃいいんでしょ！私は凰^{ファン・リンイン}鈴音。こっに見えても中国の代表候補生よ」

私はその言葉に少なからず驚いた。読んだ字の如く、彼女が中国を代表するIS操縦者の候補生。

まさかこんな早期に有力者と接触できるとは運がいい。そうなること確かめておきたい事がある。

「代表候補生だったのですか。これは失礼しました。ところで候補生という事はやはり専用機を？」

「もちろん、持っているわよ！」

鳳さんは得意げに胸を張る、その小さな胸を……………はっ！？

「あなた、今胸の事バカにしたでしょ？」（ギロ

ロリーナといい、なぜこうも私の心は読まれるのだろうか。

ご、ごほん。とにかく気を取り直して。

「いえいえ、そんな事ありません。あのよかつたら、いいですか？」

「え？何？私のIS見たいの？」

「ええ。代表候補生といえば、国家の先鋭操縦者から選別されたエリート中のエリート。そんな方の専用機、見たくない人なんてこの学園にはいませんよ」

「ふうん。でも、専用機持ちとして、タダで見せるわけにはいかないのよねえ」

と、もったいぶる彼女。しかし、これは正しい対応だ。

専用機持ちが安易に機体を晒すことは軽率である。なぜなら、このIS学園には私のような企業スパイが嫌ってほど蔓延っているからだ。いちいち他人のリクエストにに応じていたら、直ぐ技術を盗まれてしまう。でも、私はこの手の交渉に長けている。

では、お見せしましょう。ネゴシエーターも舌を巻く華麗な交渉術を。

「では、お礼として学食のスイーツをたんまりと奢らせてもらいます」

「OK、今度見せてあげるわ」

どうです？即答ですよ、即答。我ながら自分の才能が恐ろしいです。でもまあ当然ですよ。スイーツが嫌いな女の子なんていませんから。いるとしたら、その人はきつと糖尿病で糖分が取れない人です。「ありがとうございます。では、今度楽しみにしていますね」と、約束を取り付けたところで、私は入学案内所に同封されていた校内地図を広げた。

「えっと、これから入学手続きの為、事務室に向かうのですが、鳳さんはどうします？」

「ああ、丁度よかった。あたしその事務室の場所が分からなくて困ってたのよね」

「そうですか。なら、一緒にしましょう」

そう言って、私と鳳さんは並んで学校敷地内を歩き出した。

「あんた、いいヤツね。私の事は鈴って呼んでくれていいわ」

私は鳳さん　いや、鈴にバシバシと背中を叩かれながら歩く。

鳳鈴音、すこし乱暴な娘ですけど、明るくてイイ娘ですよ。私はそう思った。

それからすぐ総合受付事務所に辿り着いた。アリーナの後ろにあったのが、それだったのだ。

私と鈴は事務所の受付から書類一式を貰い、必要な項目を書き込んでいく。ほどなくして全てを書き終えた。

「ええっと、手続きは以上で終わりです。IS学園によっこそ。凰鈴音さん、アリス・リデルさん」

愛想のいい笑顔を貰うが、心は強張る。なぜなら、この瞬間から私の密偵としての仕事が始まるのだから。

とはいえ、今日のお仕事はここで終わり。本格的な活動は明日からだ。

すると、鈴が受付台に身を乗り出し、事務員さんに詰め寄っていた。ん？一体どうしたのでしょうか？

「ねえ、織斑一夏って何組？」

なるほど、気になる男の子が何組なのか調べようというのですね。抜かりありませんね、鈴。

「織斑……ああ噂の子？彼なら1組よ。凰さんは2組だからお隣ね。リデルさんは同じ1組だったかしら」

そうなのですか。これは幸運ですね。

ところで、鈴さん。そんな“代われや”的な視線を送らないでください。対処に困ります。

「そう言えば、今一組が食堂で『織斑君クラス代表おめでとうパーティー』をしているみたいよ。よかったら参加してみたら？」

「いえ、今夜は謹んで辞退させて頂きます。長い旅路で少し疲れていますので」

「あらそう。じゃあ、今夜はゆっくり休んでね」

事務員さんもそれを察してくれたらしく、執拗に誘うようなマネはしてこなかった。

ただその時、鈴の目がキャピン！という怪しげな光を放っていた。何かよからぬ事を企んでいますね、鈴。

「あの、二組のクラス代表ってもう決まっていますか？」

「ええ、決まっているけど」

「名前は？」

「え？ええっと……聞いてどうするの？」

鈴の態度におかしなところを感じたのか、事務員の女性は少し戸惑った様子で聞き返した。

「お願いをしようかなと思って、代表あたしに譲ってって」

そう告げる鈴の背後にはダークなオーラが漂っていた。私にはそれが何か解った。あれは嫉妬の炎だ。

レッドクイーンが集めてくれた資料によると、この時期クラス代表によるクラス対抗戦というものがあるそうだ。

きつと彼女は2組の代表になって1組の代表、もとい女の子と仲良くしていた織斑一夏を合法的にフルボッコするつもりなのだ。ああ、彼女の行動力には脱帽です。そして、織斑君には合掌です。

それにしても女って怖い生き物ですね。……あ、私も女か。

その後、『見てなさいよ、一夏』と荒ぶる鈴と別れ、私は用意された部屋へと案内してもらった。

部屋はパンフレットで見たとおり、高級ホテルのスイートルームに勝るにも劣らない豪華な部屋模様だ。

バスルームにはシャワーしかついていない　入浴は共同浴場を使うらしい　が不満はない。あと自炊ができるようにシステムキッチンまで完備されていた。でも、私は料理ができない……

ちなみに、今のところ同居人は居ないそうだ。ここへ案内してくれた山田先生がそう言っていた。でも、今後の都合で現れるかもしれないとの事だ。

「ふう〜」

私は堪らず、荷物を放り投げ、ベッドに飛び込む。

「ああ〜フカフカして気持ちいい。このまま寝たいですう」
でも、まだやらなければならぬ事が残っている。上司のロリーナに定時報告を入れないといけない。

私は睡魔を跳ね除け、持ち込んだ荷物の中からノートPCを取り出す。そして文面を作成。特に報告する事もないので内容は簡潔なものだ。作成したテキストを暗号化して送信。これで本当に今日のお仕事はおしまい。おつかれさまでした、私。

その時、ノックの音が部屋に響いた。時刻は9時前。こんな時間に訪問者とは珍しい。一体誰だろう。

私は急いでPCの電源を落とし、『どうぞ』と応対する。すると、見知らぬ女性が入ってきた。

髪は艶やかなブラックのショート。ルージュの口紅が色っぽい。服装は学園の制服ではなく、紺色のフォーマルスーツを着ていた。どうやらココの教師のようだ。

「へえ、アンタがそうなの。思っていたより可愛い娘じゃない。もっと無愛想な女が来るのかと思っていたわ」

その女性は、男勝りな口調でズカズカと部屋に入り込み、ドカッとベッドの上に座った。

「アタシの事はロリーナから聞いてるでしょ？」

タイトスカートから伸びたすらつと長い脚を組み、そう尋ねてくる女性。その言葉に私はピンときた。

実はIS学園に潜伏している組織の人間は私だけではない。“教師側”にもう一人、私のサポート役として密かに派遣されているのだ。そして、目の前の美女が、私をサポートしてくれる“教師側”の人間であるらしい。

「ええ。話だけなら。でも会うのは初めてですよね？」

「そうね。同じ傘下で活動しているんだけどね。で、アンタ名前は？」

「アリス・リデルです。貴女は？」

「エイダよ。よろしく」

そう名乗り、彼女は持ち込んだ缶ビールをプシュッと空ける。そして旨そうに喉を鳴らしながらビールを煽った。見事な飲みっぷりですね。某飲料メーカーからCMのオファーがきそうです。

それにしてもガサツそうな女性ですね。こんなので繊細なエージェント諜報員の仕事が勤まるのでしょうか……

「あ、今『こんなので大丈夫か？』って思ったでしょ？大丈夫よ。こう見えてもアタシ、イギリスの軍事情報局第6部の出身なのよ？」

イギリスの軍事情報局第6部。秘密諜報局とも言われる英国の対諜報組織だ。と、言われても解らないだろう。でも、<MI6>といえばピンと来るのではないだろうか。

そう。<MI6>は映画『007』で有名な諜報員『ジエームズ・

ボンド』が所属していた組織だ。

「もうやめちゃったけど、腕は鈍っちゃいないから安心して。それよりアンタの方こそ大丈夫なの？美少女なのは認めるけど」

「それこそ心配いりません。ISの操縦、戦闘、暗殺、潜入、破壊工作、全ての技術を叩き込まれていますから」

こう見えてもその手の技術には自信がある。まあ、自慢できる事ではないが。

「へえ。可愛い顔しておっかない女なのね。アンタと付き合う男は苦労しそうだわ」

「や、やっぱり、こういう物騒な女って男の人に敬遠されるのですよ。どうか？」

私は妙な気持ちになって声のトーンを落とす。

エージェントとして不謹慎かもしれないが、私だって花盛りの乙女。色恋事には興味がある。

そんな私を見てどう思ったのか、エイダは大きく口を開け、『あはは』と噴出した。

「急に淑やかなになったわね。まあ、大丈夫よ。『危険な香りがある女が好き』って男もたくさんいるから。でも、男の気を惹きたいなら、もう少し胸があった方がいいかもね」

「む、胸ですか」

私は自分の胸に触れる。残念ながらあまり大きい方ではない。丁度片手に収まるぐらいの大きさだ。

でも、まだ15なので、大きくなる可能性は秘めているはずですよ。きつと。

「ところで、アンタの名前に“リデル”ってついているけど、それってもしかして？」

エイダが興味深げに私の名について指摘してくる。これには少し説明が必要だろう。

アリス・リデルの“リデル”。それは血族の繋がりを表す“ファミリーネーム”ではない。これは組織内で『代役が存在しない有能な人材』に対して付けられる識別子の一種なのだ。コードネーム端的に言えば、極めて優秀な者の証である。

自分で言うのもアレだが、私の代理や後釜は存在しない。いるとしても早々見つからないだろう。私のIS適正值は異常だから。

「へえ、アンタがあのかルイスの子供たちだとはね。まあいいわ。これアンタに差し入れ」

「お酒ならいりませんよ？」

そう言うと、エイダは『違っつて』とUSBのフラッシュメモリーと何かの資料を私に投げた。

「その中には、先日行われた織斑一夏とイギリス代表候補生セシリア・オルコットの試合映像が入ってるわ。しかも模擬戦じゃないわ

よ？公式の試合形式に則ったガチファイト」

「それは興味をそそられますね。でも、模擬戦ならともかく、なぜ二人は試合形式の決闘を？」

「詳しい理由は知らないけど、先に吹っかけたのはイギリスらしいわ」

「へえ、意外です。すごく大人しそうな顔をしていますのに」

私は学籍プロフィールに張られていた顔写真を見ながら答える。

彼女の顔立ちはよく整っていて、気品に満ち溢れていた。肌も雪のように白く、クリーム色の金髪と相俟って実に可憐な少女だ。窓辺で詩集を読んでいそうで、どう見ても争いを好みそうには見えない。どちらかというと血を見て気絶しそうな^{イメージ}雰囲気だ。

「セシリアは今時の　女尊男卑の影響が顕著な娘でね、おまけにエリート意識が強くて、プライドも人一倍高いから、何かと癩癩を起こしやすいのよ。大方きっかけは、男でISを使える織斑が気に入らなかつたか。何か癩に障ることを言われたか、ってところでしようね。きつと『わたくしを侮辱しますの？なら、決闘ですわ』てな感じで仕掛けに違いないわ」

「……意外と喧嘩っ早いんですね。イギリス人って紳士淑女のイメージが強かったのですけど」

「そりゃ偏見ね。もしそうならアタシみたいなイギリス女がいる訳ないもの」

「自分で言っていれば世話ないですね」

「こつ見えても自分が変わり者って自覚はあるのよ」

と言って、エイダは笑いながらまたビールをぐつと煽った。

「んじゃ、渡す物は渡したし、そろそろ帰るわ。邪魔したわね」

そう言ってエイダは飲みかけのビールを片手に、ふらふらと部屋を出て行った。

私は礼をいい、再びPCを立ち上げる。そして、スロットにUSBメモリを差し込むと、撮影された映像を片端から再生した。それらをじっくりと観戦する。どうやら、今夜は眠れそうもない。

第1話 入学前夜 Previous night (後書き)

物語をだいぶん端折りました。いきなり、一巻後半からのスタートです。

なので、一夏VSセシリア戦はオールカットでございます。

けしてセシリアが嫌いといわけじゃないんですけど、物語を速く進めてヒロインを揃えたかったです。そう言うわりには話がぜんぜん進んでおりませんが(汗)

そして、物語は鈴にスポットライトが当たっていきます。その次はシャル・ラウラ 第 一 幕 セシリアといった感じになる予定です。では、また次回。

第2話 入学当日 New Life

朝の強い日差しが部屋に差し込む中、私は机の上で目を覚ました。

どうやら、エイダに渡された試合の映像を解析しつつ、資料に目を通している内に寝てしまったようだ。

ふわぁ。ところで今何時ですか？6時半？よかった、今からシャワーを浴びても十分授業に間に合いますね。

という訳で、少しシャワーを浴びてきたいと思います。え？サービスシーン？お生憎さま、そのようなモノはありません。残念でしたね。では、行ってきます。

20分後

「さてと」

私は下着姿で、ベッドに並べたIS学園の制服を見下ろす。

トップスは特に手を加えておらず、デフォルトのまま。ただ袖口をレースで装飾してある。

ボトムスのスカートは、タイトではなくプリーツ。内側に同様のレースをあしらひ、二重構造にしている。

私はそれらを着込み、黒のニーソックスを穿く。最後に青色の棒ネクタイを首に巻いて、着替えは終了。

「残るは……これですね」

私はベッドに沈む赤いナイフを見る。実はこれが<赤騎士>の待機形態なのだ。

一般的にISの待機状態はアクセサリーの類である事が多いのだが、<赤騎士>は何故かこんな物騒な形態なのである。ロリーナ曰く『貴女を守りたいという気持ちの現れでは?』だそうだ。はは、泣けますね。

でも、今は困る。いくらIS学園が特殊な学校でも、ナイフなんて持ち歩いていたら絶対浮くだろう。

かといって置いていく訳にもいかない。

私は太ももにベルトを巻きつけ、そこに赤騎士を備え付ける。もし怪しまれたら護身用と言って誤魔化そう。

最後に姿見で身嗜みを整え、姿勢を正す。変なところは、なしつと。

「よし、これで準備OK」

時計を見ると時刻は8時前になっていた。すっかり着替えに時間を食ってしまったようだ。

私は急いで黒のローファアを履き、部屋を飛び出す。そこで気づく

あつ、朝ご飯、食べてない。

私は空腹を紛らわすように、お腹を撫でながら廊下を歩く。

昨日、案内してくれた山田先生の話によると『SHRであなたの自己紹介をしますので、直接教室へは向かわず、一度職員室に立ち寄ってください』という段取りらしいので、私はその足で職員室へ向かう。

その途中、昨日見た試合の映像を思い返した。

『織斑一夏VSセシリア・オルコット』。

試合結果はセシリア・オルコットの勝利で終わった。ただ、腑に落ちない点がいくつもあった。

その内の一つが勝敗の決した瞬間の状況だ。序盤はセシリアの<ブルーティアーズ>が流れを掴み、試合を優勢に進めていった。だが、終盤には織斑一夏の<白式>が一次形態移行　おそろしい事に初期設定のまま序盤中盤を戦っていたらしい　を終え、怒涛の快進撃を見せた。

そして、<ブルーティアーズ>を圧倒。間合いを確保し、一太刀浴びせようとした瞬間、それは起こった。

なんと、圧倒的優位を誇っていた織斑一夏が唐突に負けたのだ。敗因は<白式>のエネルギー切れ。

だが、シールドエネルギーを削られた様子はなかった。なら原因は何か。考えられる要因は二つ。

<白式>の整備不良による自滅か。<ブルーティアーズ>に特殊な兵装が搭載されていたか。

今日はその辺りに重点を置いて、探りを入れていくとしよう。

職員室に到着すると、私は職員の手配でその場に待機した。

それからしばらくすると、例の彼女が現れた。そう、最強のIS操縦者 織斑千冬だ。

面持ちは剣のように鋭く、凛々しい。鍛え抜かれた姿勢は同性ですら魅了して止まない。

『綺麗な薔薇には棘がある』という言葉があるが、その言葉はまさに彼女の為にあるのではないだろうか。

もしかして彼女が一組の担任？織斑一夏といい、私はつくづく織斑家と縁がありますね。光栄な事です。

「お前がアリス・リデルか？」

「は、はい」

威風堂々とした雰囲気呑まれ、声が若干上擦った。

「よし、ついでに」

そう言つて踵を返し、コツコツと歩き始める。それだけの仕草なのに優雅さがあつた。

我に歸つた私は、急いで彼女の後を追う。

「織斑千冬さん、貴女があの名高いブリュンヒルデですよね？
お会いできて光栄です」

「織斑千冬さんではない。ここでは織斑先生と呼べ。いいな？」

「す、すみません。織斑先生」

叱られ、また声の上擦つた。おまけに私の言葉に対しては、何も返事してもらえなかつた。

まあ、今のは私に落ち度があつたので仕方ない。

それ以降、話しかける機会を失い、結局タイミングを計っている内に教室へ到着してしまつた。

「ここで待っている。呼んだら入ってこい」

そう言つて織斑先生は、私を置いて一人教室へ入つていった。

さて、自己紹介をさせられるでしょうから、待っている間に発生練習でもしておきましょうか。第一声で囁んだら恥ずかしいですからね。では、ん、ん、ごほん、アメンボ赤いなあいうえ　　バシッ
！！　　お？

今、ものすごい炸裂音がしましたが？何でしょうか？

私が音のした方向に目を遣ると、ツインテールの少女が織斑先生に出席簿で叩かれていた。　　ってあれは、鈴じゃないですか!?

なぜ二組の鈴が一組の教室に?まさかクラス対抗戦が待ちきれず、この場で織斑君を亡き者に?

すると、私の脳内でジャパニーズギャング『ヤクザ』に扮した鈴が、拳銃を片手に『命、取ったらあ!』と叫ぶ姿が再生された。まったく、そういう過激な事は映画の中だけにしておきなさいよ、鈴。

「鳳、もうSHRの時間だ。お前はさっさと自分の教室へ戻れ」

「え?ち、千冬さん!?!」

「織斑先生と呼べ」

そしてまた炸裂音。あまりに痛そうな音だったので、思わず私まで肩を竦めてしまった。

きつと今の一撃で鈴の脳細胞は五千個死にましたね。南無。

「わかったら、さっさと戻れ。そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

織斑先生の辛辣な言葉に、鈴はすごすごとドアから退いた。あの鈴を負かすなんて流石ブリュンヒルデだ。

しかしまあ、びゅーんと逃げていく鈴は、相変わらずネコみたいたった。

そして、私を一人置いてSHRが始まった。

S H Rから昼休みまで特筆する事はなかった。自己紹介も無難に終えたし、授業も遅れを取る事はなかった。

休み時間には『アリスさんはどこから来たの？』『IS適正いくつ？』『髪、綺麗だね』と恒例の質問攻めを受けたが、これもボロを出さず華麗に捌ききった。

ちなみに回答は『生まれはイングランドです（ダミー国籍）』『C+です（書類上のみ）』『貴女の髪も綺麗ですよ（本音）』という感じだ。

適正を低く見積もっているのは、皆の感心を遠ざける意図がある。私は密偵なので、注目されるよりされない方が動きやすい。

国籍はダミーだが、まったくの嘘という事でもない。イングランドは母の故郷なのだ。

さて、休み時間は一時間以上ある。この時間を活かして、織斑一夏に接触し　グウ

.....

そう言えば、朝から何も食べていませんでしたね。腹が減ってはなんとやら、その前に昼食にしましょうか。

あつ。いい事思いつきました。折角ですし、織斑君も食事に誘いましょう。

思い立ったら吉日。私はさっそく席を離れた。

<Side:一夏>

午前の授業が終わって昼休み。俺、織斑一夏は大きく背伸びして、深い溜息をついた。

未だISの事がチンプンカンプンな俺にとって、ISの専門講義はまさに地獄。おまけに実姉の千冬姉が担任だから、迂闊にうたた寝もできない。すれば、容赦ない出席簿アタックが待っている。なんていう拷問だろうか。

「しかし、あの鈴がIS学園に転校してくるとはなあ」

鈴っていうのは、俺のセカンド幼馴染の名だ。本名は凰鈴音。読み方はファン・リンイン。『おとりずずね』じゃないからな。ちなみに俺は略して鈴と呼んでいる。

鈴とは某事情で一年ぐらい前に離れ離れになったんだが、何の運命か、ついさつき再会したんだよなあ。

しかも、本人談によると今は中国の代表候補生らしい。一年見ない内に立派になったものだ。

「おい、一夏。話がある」

と男勝りな口調で話しかけてきたのは、黒髪のポニーテイルが特徴的な女の子、篠ノ之箒だ。

さつき鈴はセカンド幼馴染って言ったけど、箒がファースト幼馴染だ。箒は俺が子供の頃通っていた剣道場の娘で、付き合い自体は鈴より長いかな。ついでに言うと、鈴と箒は面識がない。色々あって入れ違いで俺と知り合ったんだ。

とまあ、幼馴染の紹介はこれぐらいにしてと。

「なんだよ、箒？」

「さ、さつき女子と随分仲良さそうにしていたが」

さつきの女子？ああ、鈴の事か。そりゃ、3年以上つるんだ仲だからな。仲がいいのは当たり前だろう。

んで、その鈴がどうしたって？

「その事について、わたくしも詳しく知りたいですわ」

と、上品な喋り方で問い詰めてきたのは、イギリスの代表候補生セシリア・オルコットだ。

入学当初は俺を目の敵にしていたのだが、クラス代表を決める試合で戦って以来、積極的に俺の世話を焼いてくれるようになった。なんでだ？ あつ、もしかして喧嘩の後に友情が芽生えるアレか？そういうノリって男同士だけだと思っただけだなあ。男女の間でもあるもんなんだな。

「まあ、説明なら後ですから、とりあえず学食いこうぜ」

休み時間には限りがある。駄弁って昼食時間を減らすのはおしい。時間は有効に使おうぜ。

「まあ、お前がそういうならいいだろう」

「そうですね。行って差し上げない事もなくってよ」

よし、決まりだな。そう思って立ち上がると、三度目の声が掛かった。

「あの、もしよろしければ一緒に昼食を取りませんか？」

そう尋ねてきたのは、紅髪碧眼の女子。確か今日IS学園に転入してきた娘だ。名前はアリス・リデルだっけ。

アリスってあの『不思議の国のアリス』の主人公と同じ名前だよな。うん、ポピュラーでいい名前だ。

「ああ。いいぜ」

俺は即答する。食事は多い方が楽しいからな。

「筈たちもいいよな？」

「ああ、私がかまわない」

「わたくしもかまいませんわ」

というわけで、俺たち4人は、そろそろと学食へ移動した。

場面は変わって食堂。俺は食券販売機で日替わりランチを選択する。ここ数日、ずっと日替わりランチなのだが、まったく飽きない。当然か。日によって替わるもんな。

箸はきつねうどん、セシリアは洋食ランチを注文していた。

そして、アリスはというと、未だに販売機の前で、うぐんと唸っていた。なんだ、なんだ？

「もしかして販売機の使い方、分からないのか？」

俺が親切に話しかけると、アリスは慌てて両手を振った。

「いえ、そうではなくて。思っていた以上に品数が充実していて、どれにしようかと」

なるほど、メニューの選択に迷っていたのか。わかる。俺も最初そうだった。

「まあ、これからずっと通うんだから、そんなに悩まなくていいんじゃないか？今日食べなかったものは、明日注文すればいいんだし」

「あ、そうですね。では、手始めはこれに、いやこれは明日にして、今日はこれを、いや……うぐん」

「おいおい、結局悩むのかよ！俺の助言ちゃんと聞いていたか！？」

「後列が詰まり出したので、俺は二度目の助け舟を出す事にした。一応言っておくが、俺の仏の顔は五度までだからな。うん、俺優しい。ちなみに千冬姉に仏の顔はないので、あしからず。」

「じゃあ、俺と一緒にのものにしたらどうだ？今日は鯖の塩焼きだからうまいぞ」

「あ、そうですね。では、そうします」

「そう言っただけでアリスは金を入れて、俺と同じ日替わりランチを頼んだ。よしよし、よく決断した。」

「一夏、ずいぶんとその子に優しいな（ムスッ）」

「そうか？」

「アリスは転校してきたばかりで、右も左も分からない娘だからな。誰かが面倒を見てやらないと。」

「それに俺はこれでもクラス代表だし、クラスの長として使命を果たしたまでだ。」

「やっと来たわね。待っていたわよ、一夏」

「全員が食券を買い終えたところで、どーんと現れたのは、セカンド」

幼馴染こと鈴だった。

理由はよく分らんが、どうやら待ち伏せしていたらしい。

「まあ、鈴、待っていてくれたのは嬉しいが、そこに立たれると邪魔だ。後がつつかえる」

ただでさえ、アリスがグズった所為で後列が押しているのだ。さっ、どいた、どいた。

すると、背後でぐうぐうと腹を鳴らす音が聞こえてきた。

「す、すみません、朝食を抜いてきたもので……」

そう白状したのはアリスだ。どうやら、彼女が腹を鳴らした張本人らしい。

しかし、腹が鳴るほど空腹だったのか。これはいかな。早く鈴に立ち退きを要求しなくては。

「ほら、今の聞いただろ？アリスは腹の虫が鳴くほどハラペコなんだ。だから、早く道を空けてやってくれ」

な！と俺が強く同意を求めると、アリスは耳まで赤くなった。おお髪も赤色だから、本当に真っ赤だ。

「い、一夏、あんたね……」

なぜか俺を半目で睨みながら、道を空ける鈴。なんだ、俺なんか悪い事言った？

「前々から思っていましたが一夏さんにはデリカシーというものが無さ過ぎですわ」

と俺の足を踏んでいくセシリア。うわっ、いてっ！

「自業自得だ」

そして痛がる俺を無視して、そそくさ去っていく筈。アリスはアリスで、真っ赤なまま俯いて通り過ぎていった。

何だよ、一体、俺が何をしたっていうんだ……。

ともあれ、俺たちは席を確保し、鈴を加えて食事を始めた。

昼食の話題はというと、俺と鈴の『お互い一年の間、何をやっていたか』に占められていた。

「鈴、いつ帰ってきたんだ。おばさんは元気か？いつ代表候補生になっただよ」

「質問ばかりしないでよ。あんたこそ何IS使ってるのよ。ニューズ見た時びっくりしたじゃない」

丸一年ぶりの再会という事もあって、とにかく話が弾んだ。

その所為で、少し周りの人を置き去りがちにしていたが、そこは勘弁してほしい。

「ゴ、ゴホン！一夏、そろそろどういう関係なのか、説明してもらいたいのだが？」

「そうですね！一夏さん、もしかして、こちらの方とお付き合いし

てらっしやいますの!？」

疎外感を感じてか、やたら棘のある言葉で箒とセシリアが言い寄って来る。

よく見ると二人の箸は全然進んでいなかった。なんだ、昼飯そつちのけか？

「お前ら、少し落ちつけ。アリスを見てみる。静かにメシ食ってるぞ」

そう言つてアリスに視線をやると、彼女は嬉しそうに鯖の塩焼きを頬張ろうとしていた。でも、箸がうまく使えないのか、解した身を口に持つていつてはポロツと落としていた。その後も、ポロツ、ポロツと運んでは落とすという作業を繰り返す。次第に彼女の目に涙が

「ちょっと待つててくれ。フォークかなんか貰つてくる」

日替わりランチを進めた本人である俺は、すごく居た堪れなくなり、箸に替わる物を食堂へ取りに向かった。

「やっぱり、アリスには優しい（ムスっ）」

箒がなんか呟いていたけど、聞き取れなかった。まあいいや。それよりフォークとスプーンだ。

<Side:アリス>

「すみません、ご迷惑おかけします」

「いや、俺こそすまん。箸が使えないとは思ってなくて」

「いえいえ。今度からは使えるよう練習しておきますね」

「おっ」

そう言ってもらい、私は織斑君からフォークとスプーンを受け取った。

これでようやく食事に取りつける。うーん、鯖の焼けた匂いが香ばしい。食欲をそそられますね。

「それで何の話だったっけ？」

と織斑君。あ、すみません。話を脱線させてしまったようで。もぐもぐ。

「二人がどういふ関係か聞かせてほしいのだが。そ、その二人はやはり、つつ付き合っているの……か？」

熱を帯びた頬で、しどろもどろに言う篠ノ之さん。もしかして、彼女も織斑君に懸想しているのでしょうか？

それにしても、篠ノ之箒さんってどこかで見た事あるのですよね。篠ノ之箒、篠ノ之、しののの………束。

「あっー!!」

「ど、どうした、アリス。急に声をあげて」

「え、あ、いや、鯖の小骨が喉に刺さって……」

「そ、そうか。気をつけろよ」

「は、はい」

はしたなく大声を出してしまったが、無事思い出す事ができた。

篠ノ之箒。あの稀代の天才にしてISの開発者『篠ノ之束』の妹さんじゃないですか。

さすがご姉妹、よく似ていますね。美人なところとか、胸が大きいところとか。

ああ、モヤモヤが晴れてスッキリしました。これで心置きなく食事が取れそうです。

「で、なんの話だったけ？」

と、織斑君。すみません、何度も話を脱線させてしまって……

「だから！！ お二人の関係ですわ！！アリスさん、これ以上妙な横槍を入れたら承知しませんわよ？」

「す、すみません」

ついにイギリス代表候補生のお叱りを受けてしまった。

はあくなんか今日の私、怒られてばかりな気がします。でも、相変わらず鯖は美味しい。

「そうだったな。実は俺と鈴は幼馴染なんだ。別に付き合ってるわけじゃねえよ」

へえ、鈴と織斑君は幼馴染の間柄だったのですか。少し意外ですね。何が意外かって、国籍が違う幼馴染って珍しくありません？

「幼馴染？」

と、怪訝そうな顔で聞き返したのは、篠ノ之さんだ。確か織斑家と篠ノ之家って交流があったんでしたっけ。

では、篠ノ之さんも織斑君と幼馴染の間柄なのでしょうかね？もぐもぐ、このおひたし美味しいですね。

「あゝ。えつとだな。箸が引越していったのが、小四の終わりだっただろ？鈴が転校してきたのは、小五の頭なんだ。それで中二の時の終わりに国へ帰ったんだよ」

なるほど。入れ違いで織斑君と知り合ったから、鈴と篠ノ之さんはお互い面識がないのですか。

「んで、こつちが箸。前に話しただろう。小学校からの幼馴染で、俺が通っていた剣道場の娘」

「ああ、あの篠ノ之博士の妹さんだったっけ？」

鈴は不審者でも見るような目でジロジロと篠ノ之さん（特に胸）を観察する。

篠ノ之さんも篠ノ之さんで、負けじと鈴を睨み返していた。

「あたしは、凰鈴音。よろしくね、篠ノ之箒さん（てか、なんつーうらやましい胸してんのよ、この娘!？）」

「ああ、こちらこそよろしくだ、凰鈴音（幼馴染だど？幼馴染は私だけではないかったのか!？）」

一見、友好的に見えた二人だったが、視線の間にはバチバチと火花が散っていた。

しかも、背後で龍と虎が睥睨し合っている。もしかして、これが噂に聞く修羅場というヤツだろうか？

「んんん、ごほん。わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生・凰鈴音！」

そこへ勇ましく介入したのは、オルコットさんだ。

オルコットさんは胸を反り、片手を腰に添えて、ビシッと言い放つ。偉そうな態度もオルコットさんがやると実に様になる。私がやっても、きつところはいいかない。

「……あんだ誰？」

でも、残念ながら鈴にその勇ましさは伝わることはなかった。

「わ、わたくし、イギリス代表候補生、セシリア・オルコットですてよ。まさかご存じないの!？」

「うん、あたし他の国とか興味ないから」

さすが鈴。英国貴族のお嬢様をこうもバツサリ斬るとは、恐れ入り

ます。

でも、もう少し言葉に気をつけた方がいいのでは？いつか不敬罪で訴えられますよ？

「い、い、言っておきますけど、わたくし、あなたのような方には負けませんからね」

「そ。でも戦ったら、あたしが勝つよ。あたし強いもん」

「言いましたわね、凰鈴音！！でしたら、わたくしと決　　」ところでさ、一夏あんたクラス代表なんだった？」「

憤慨するオルコットさんに、見事なスルースキルを発動する鈴。

調子を狂わされたオルコットさんは、憤りを晴らすようにその場で地団駄を踏んだ。

そんな彼女を置き去りにして、話は進んでいく。

「えつと、まあ、成り行きでな」

「そう。あ、あのさ。よかったら、あたしがISの操縦、教えてあげてもいいわよ？」

すると、ドン！！とテーブルを叩いて、篠ノ之さんとオルコットさんが勢い良く立ち上がった。おとつと、私のお味噌汁がこぼれるつ。

「勝手な事言うな。一夏に教えるのは私の役目だ！　なんせ、わたしは一夏の幼馴染だからな。気兼ねないというものだ」

「勝手を言わないでくださる？一夏さんを指導するのは、このわたくしですわ。なんせわたくしは代表候補生ですから。これ以上に適したコーチはおりませんわ」

篠ノ之さんとオルコットさんは、見事にハモリながら自分のアドバンテージを主張する。

でも、お二人方、失念していませんか？鈴の立場を。

「なら、あたしが適任ね。だって、あたし一夏の『幼馴染』で中国の『代表候補生』だもの」

『ぐっ！』

これまた見事にハモリ、二人は言葉を詰まらせた。

そう、鈴は篠ノ之さんとオルコットさんの両方のアドバンテージを持ち合わせている。自分たちのアドバンテージを主張しても、鈴が有利になるだけなのだ。そう言った意味では、鈴は二人の天敵かもしれない。

「だ、だとしてもだ！！」

それでも二人は何かないかと食い下がる。どうやら彼女たちの辞書、改め恋に撤退の文字はないらしい。

そういう二人の力強さを、私はうらやましく思った。私は奥手だから、こつ、押しの強いアプローチができない。

「そもそも一夏は一組の代表だ。敵の施しは受けん。二組がでしゃばるな」

「そうですね、一夏さんは一組の代表。一組の面倒は一組で見るのが当然ですわ」

一組の面倒は一組で見るのが当然。その言葉に、私の電球がピコンと閃いた。

「あの、よければ、私もご指導してもらえないでしょうか？一応、私も1組ですし」

オルコットさんは一組の面倒は一組で見ると言った。なら、同じ一組である私も面倒を見てもらえるのでは？と、私は踏んだのだ。もちろん、指導を給わりたいというのは建前で、本当は代表候補生である彼女たちに近づく為の口実だ。まあ、素直に親睦を深めたいという気持ちも大いに在るのだけだ。

「え、アリスさんもですか？」

私の突拍子もない提案に、織斑君を除く全員が面を喰らっていた。

「あ、ご指導は厚かましかったですね。では、織斑君の訓練を横から見学させてもらってもいいですか？」

「おお、いいぞ。てか、見学なんて言わないで、一緒に訓練受けようぜ」

「そうですね？では、お言葉に甘えて」

織斑君は意外とあっさり受け入れてくれたものの、篠ノ之さんとオルコットさんはやや不満げだった。

それもそうだろう。彼女たちが特訓の指南を買っているのは、おそらく織斑君と二人きりになる口実を作るため。それを邪魔されるかもしれないのだから、良い顔をしなくて当然だ。

でも、私は彼女たちの恋路を邪魔するつもりは更々ない。私は無粋でもKYとやらでもありませんから。

「あの篠ノ之さん、オルコットさん、少しいいですか？」

そう言っただけで私は、篠ノ之さんとオルコットさん呼び寄せる。そして、こつこつ耳打ちした

「勿論、教えて頂くからには、お二人方と織斑君の仲を取り持ちます。私は指導を給わりたいだけなので」

すると、二人の険しかった顔がみるみる綻んでいく。効果覲面はこの事ですね。

「そ、それは本当ですか？」

「わ、わわわ、私は、べ、別に一夏とそういう仲になりたいわけじゃない」

「では、わたくしだけ取り持つてくださる？」

「いや、待て。折角の厚意を無駄にするのは、アレだろう。私もその厚意を受けさせてもらう」

「ふふふ、分かりました。ではよろしくお願いしますね。篠ノ之さ

ん、オルコットさん」

こうして、二人の了承　口車に乗せたとも言う　を得て、私は
彼女らの特訓を受ける事となった。

そうそう、後で鈴にも何かしてあげないとフェアじゃないですよ
ね　って、あれ？私この学園に恋のキューピットをしに来たの
でしたっけ？いやいや、私は密偵として……まあいいです。情報を
貰うだけではアレなので、これぐらいの事はしましょう。織斑君、
鈍そうですし。

第2話 入学当日 New Life（後書き）

三話目にして、ようやく我が主人公『織斑一夏』の登場です。

しかし、まあオリ主アリスとの絡みが少ないこと少ないこと。昔からの接点がないというのもあるんですけど、後半からの絡みが一切ない。いかに作者に能力がないかが露見しましたね。

しかし、次回からは一夏がアリスをいじり倒します！！（エロい意味じゃないよ？）

と、いうわけで次回またお会いしましょう。

<Side:一夏>

放課後。セシリアにIS操縦を教わる為、俺は第三アリーナへ向かう。

一緒に指導を受けるアリスは、訓練機の使用許可を貰う為、一度事務室の方に寄ってから来るそうだ。

「ん？」

アリスより一足早くアリーナに着くと、そこには純国産IS<打鉄>を装備した筈が立っていた。

ISを装備した筈は初めて見るので、思わず間の抜けた顔をしてしまう。

「な、なんだ、その顔は。おかしいか？」

「い、いや、似合っているよ」

うん、本当によく似合っている。打鉄の武者を模した堅牢さと和の風格が、実に筈の雰囲気とマッチしていた。そこに専用武装の刀型近接ブレードが加われれば、まさにラストサムライといった感じだ。

その格好で外国のイベントに参加したら『Oh! Samurai Girl!』とかいって持て囃はされそうだな。

「ギロ」

うわ、睨まれた。てか怒るなよ。褒めたんだから。

俺が怖気づいていると、その隣でセシリアが表情を強張らせていた。何？セシリア、サムライ怖いのか？そりゃ頭に矢の刺さった落武者とかだったら、俺も怖いけど。

「くっ。まさかこんなにあっさり訓練機の使用許可が下りるなんて……」

と悔しがるセシリア。

なぜ、そこを悔しがる。訓練機の使用許可が下りれば、セシリアはラクできるのに。

「よし、一夏、訓練を始めるぞ。白式を展開しろ」

「お、おう」

俺は言われるがまま白式をコール。粒子が俺を包み、瞬く間に白い装甲が周囲に展開される。

そして、〈白式〉唯一の武器《雪片式型》を展開して、正眼の構えを取った。

冷然とした雰囲気周囲に広がる。おそらくこれが殺気と呼ばれるものだ。

「では、参　　！？」

緊張感がピークに達した時、青い物体　　セシリアのISS〈ブル―ティアーズ〉が俺の視界を遮った。

「お待ちなさい。一夏さんのお相手をするのは、このセシリア・オ

ルコットでしてよ」

「ええい、邪魔をするな。今日は私が一夏に稽古をつけるのだ。セシリアは下がっている」

「いえ、断固拒否しますわ!」

「ならば斬る!」

何でそうなるんだよ。お前は辻斬りか　　て思っている内に、箒が袈裟斬りを繰り出した。

セシリアはそれをあらかじめ展開しておいたショートブレード《インターセプター》で受け止める。更に後ろへ跳躍して剣撃の勢いを殺し、そのまま射撃に必要な間合いを確保した。

「訓練機に遅れを取るほど、このくブルーティアーズは優しくな
くてよ」

そう言うが早く、流れるような動作で《スターライトMk?》を展開。瞬時に安全装置を外し、トリガーを連続で絞る。

「　甘い!」

箒は超高速で飛来する光の弾丸を紙一重で躲す。

さすが剣道をやっているだけはある、反射神経と動体視力が抜群にいい　　って感心している場合じゃない!!

「おい、俺の訓練はどうした!」

と叫ぶが、バトルフィールドを上空へ移した彼女らには聞こえない。
オープンチャネル
公開回線を使えば聞こえるようにできるのだが、しない。だって妙な横槍を入れたら、こつちが酷い目に遭いそうなんだもん。そこ！チキンとかいうなよ！ISを使ったリンチは冗談じゃすまないんだからな！！

「随分と派手にやっていますね。模擬戦ですか？」

と言ったのは、遅れてやってきたアリスだ。

「あれ、誰と誰です？」

アリスは目を細め、上空を凝視する。アリスはISを展開していない為、ハイパーセンサーの恩恵を受けていない。だから、遙か上空にいる筈とセシリアが米粒ぐらいにしか見えていないのだろう。誰か視認できないのは当然だ。

「筈とセシリアだ」

俺が教えてやると、アリスはキョトンとした。

「え？なぜ二人が戦っているのです？二人は織斑君に教える側の立場でしょ？あ、もしかして“技は見て盗め”というヤツですか？」

「いや、違うと思う。なんか、どっちが俺の相手をするかで揉めなさ、ああなっただ」

「なるほど、一人の男性をめぐって争いを……ふふ。罪な男ですね、

織斑君は」

彼女の言っている事がよく分からない俺は首を傾げた。罪ってなんだ？よく分からんが、俺は潔白だぞ。

てか、アリスに『織斑君』って呼ばれるの、なんか、こっ、ムズ痒いな。他の女子からは散々『織斑君』って呼ばれているだけだ。

「なあアリス、一夏でいいよ」

「うん？」

「俺の事は“織斑君”じゃなくて一夏って呼んでくれ」

「な、名前で呼ぶのですか」

「そうだけど、なんだ？抵抗あるのか？」

「いえ、あの、男の人を名前で呼ぶのが、その、なんか照れくさくて……」

アリスは照れながら人差し指同士をちょんちょんと合わせる。心なしか頬もほんのり赤い。

もしかしたら、彼女も他の女子と同様に男のいない環境が育ったのかもしれない。でも、男の名前一つ呼べないようじゃ、恋愛の一手もできないぞ。

「そんな事で照れるなよ。名前を呼ぶだけだぞ。ほら呼んでみる」

「そうですか？で、では、失礼して……一夏、さん」

アリスは上目遣いで、すこし照れくさそうに俺の名前呼んだ。って
“さん”付け？

「さん”はいらねえって。ほら、もう一回言ってみるよ。イ・チ・
カって」

「は、はい……い、一夏」

「そつだ、良く言えたな」

こんな事で褒めるのもバカらしいけど、まあアリスが上機嫌だから
いいか。

「ふふ、一夏」

「おう」

「一夏」

「なんだ？」

「一夏？」

「そ、そんなに何回も呼ばなくていい」

名前を連呼される事に気恥ずかしくなってきた俺は、アリスにスト
ップをかける。

すると、アリスも浮かれていた自分に気付き、耳を真っ赤にした。

「す、すいません、調子に乗りました。でも、一夏って、いい名前ですよね」

「だろ？俺も気に入ってる」

俺たちを捨てた両親に唯一感謝するとすれば、この名前をくれた事だろう。

にしても、俺が『一の夏』で姉が『千の冬』。もし妹か弟ができていたら、『百春』とか名付けていたんだろうか。

まあ、どうでもいい話だな。俺は頭を振って、意識を切り替える。すると、アリスがこちらを見ていた。

「そう言えば、一夏ってオルコットさんと戦ったのですよね？」

「ああ。負けたけどな」

初陣にしては、結構イイ線いっていたと思うんだけど、負けは負けだし、男らしく認めよう。

「私、その時の映像を拝見させてもらったのですが、序盤はともかく終盤では織斑君の方が圧倒していたと思うのです。でも、最後の最後に負けてしまいましたよね？それも唐突に。なぜです？」

「ああ、それは白式の能力の所為だな」

「白式の能力？」

「ああ。正確にはこの《雪片式型》の能力なんだけどな」

首を傾げながら疑問符を浮かべるアリスに、俺は《雪片式型》を掲げながら続けた。

「この《雪片式型》には、相手のエネルギーの残量や性質に関係なく、それを無効化する能力があるんだ」

「つまり、シールドバリアを始めとしたエネルギー体全てを無効化できるという事ですか!？」

アリスが目を見開いて驚く。そりゃそうだろう。

エネルギーの量や質に左右されず、それを無効化する。物理学を無視したそれは、最早科学というより魔法に近い。そんなチート能力があるなんて、にわかには信じられないだろう。正直、俺も驚いたもん。

「でも、それを行うには膨大なエネルギーが必要？」

お?この娘、鋭いな。俺、千冬姉に教えてもらうまで気付かなかつたのに。

「その通りだ。この《雪片式型》の能力を発動するには、莫大なエネルギーが必要なんだ。しかも、それを補う為にシールドエネルギーまで攻撃用に転化しないとイケない。それにしても、よく分かったな」

「ええ。強力な武器ほどハイリスクかハイコストと相場が決まっていますから。エネルギー無効化攻撃なら、それぐらいの代償があって当然かな、と」

なるほど、ちゃんと根拠があったのか。俺も根拠を以って相手の弱点とか言い当ててみたいものだ。

「という事は、《雪片式型》を多用し、肝心な時にエネルギー切れを起こした、という訳ですか？」

う、確かに自滅には違いないけど、こうハッキリ言われると情けなくなるな……

「でも、逆に言えば《雪片式型》の攻撃が当たっていれば、勝てたかもしれないんですよ？」

「たぶんな」

ISのシールドバリアーが貫通、あるいは無効化されると、《絶対防御》と呼ばれる機能が働く。

その機能が働くとISの全エネルギーが防御に回され、あらゆる攻撃から操縦者を守ってくれる。しかし、その代償に膨大なエネルギーが消費され、戦闘継続が不可能になるのだ。だから、あの時《雪片式型》のエネルギー無効化攻撃を喰らわせられていたら、〈ブルーティアーズ〉の《絶対防御》が発動し、勝利できていたかもしれないのだ。

「ああ〜そう思うとすげー悔しい。俺がもっと〈白式〉の事を熟知していればなあ〜」

「でも、その事を学習できただけでも、今回の決闘は有意義だったと思いますよ？」

アリスが慰めるように俺へ微笑みかけると、《スターライトMk？

》の流れ弾が近場に着弾した。

その衝撃で、砂嵐が舞い、俺たちの周囲に暴風が駆け抜ける。

俺はISを纏っているので平気だったが、生身のアリスはそうもいかない。特に風に弱いスカートなんかは……。

「きゃ!?!」

アリスは真っ赤になって捲れる上がるスカートを押さえるが、白式のハイパーセンサーの方が早かった。俺の眼前に、鮮明かつ拡大化された逆三角形の布が映し出される。

スカートの中は 白式だった。つまり純白。

「み、見ました?」

アリスが涙声で問ってくる。

いや、これは、どう言ったらいいのか、不可抗力というか、男の性さがというか。

「見たんですね。しかも、ハイパーセンサーのダイレクトビューまで使って」

口を“へ”の字にして、ムスッと怒り出すアリス。

当然といえば当然の反応なのだが、全然怖くないというか。どつちかというところ可愛いかな。こっつ、ちよっかいを出したくなるような感じの。いやいや、そんな事思っている場合じゃないな。

「もお、一夏のスケベっ！」

アリスは怒ってく白式への装甲を蹴った。こら、そんな事したら自分が痛いだけだぞ。

「い、痛いですう〜」

ほら、みる。だから言ったのに。てか、蹴った爪先を押さえてケンケンするな。またパンツ見えるぞ。こっちにはハイパーセンサーの視覚補助機能があるんだから、気をつけてくれ。

「こ、こんな事なら、もっと可愛いものを穿いてくればよかったです……」

パンツを見られた上、痛い思いをするなんて、段々彼女が不憫に思えてきたな。

う〜ん、『編み込まれたレースとワンポイントのリボンがオシャレで、十分可愛いパンツだったぞ』とフォローするべきだろうか。いや、でも、見た本人が言くとタダの変態に思われん？

< 警告：ブルーティアーズにロックオンされました >

「へ？」

俺が呆けた顔をしている内に、セシリアの狙撃が俺の腹部を打ち抜いた。

シールドバリアーで身体は無事だが、勢いは殺せない。俺はコントみたいにひっくり返った。

そんな俺を見下すようにすうーと下りてくるセシリアのくブルーテ
イアーズ>と箒のく打鉄>。

その光景はまさに女神光臨。でも、微笑は浮かべていない。代わりに
青筋を浮かべていた。どうやら女神たちは非常にご立腹らしい。

「一部始終、ハイパーセンサーで拝見させて頂きましたわ。一夏さ
ん」

「男の風上にも置けない奴め。その性根、叩き直してやる」

そして俺はわりを食うのだった。

特訓を終えた俺は、制服に着替えた後、満身創痍の身体を引きずり
ながら自室に戻った。

結局あの後、俺は二人からキツイしごきを受けた。もう、あれは訓
練とは名ばかりの虐待行為だったな。訴えたら勝てるのではなかる
うか。

でも、流石に箒も悪いと思ったのか、『シャワーを先に使ってもい
いぞ』と気を遣ってくれた。うん、それは凄くありがたい。まあ、
欲を言えば、湯船に浸かりたいところだが、それは無理な話だな。
だってIS学園は女の園。分かるだろ？男湯がないんだ。でも、山
田先生が『いつか男子も入浴できるよう、時間を割り振る』と言っ
ていたので、それに期待しよう。

「遅かったじゃない、一夏」

と、疲れた俺を出迎えてくれたのは、セカンド幼馴染の鈴だった。

鈴は俺の部屋の前で、自前のボストンバックをクッション代わりに足を組んでいた。

その姿は、まるで不貞腐れて家を飛び出した家出娘のようだ。断じて口には出さないが。

「今特訓が終わったところなんだよ」

「そうなんだ。じゃあ、これあげる」

そう言って、鈴が何かを投げる。それはスポーツドリンクだった。しかも、ぬるいやつ。

さすが鈴。俺の事分かっている。俺は『スポーツ後の飲み物はぬるいもの』と決めているのだ。実は冷えた飲み物の一気飲みは身体に悪いんだぜ？

「おお、悪いな、鈴。サンキューな」

「いいわよ、お礼なんて、別に」

俺が笑って礼を言うと、鈴はプイっと横を向いた。ちょっと頬が赤かったが、風邪か？

「まあ、立ち話もあれだし、中に入れよ。茶ぐらいならご馳走するぜ？」

「じゃ、じゃあ、そうしようかな」

『おう、そうしろ』と俺はドアのロックを解除して、部屋に鈴を招き入れる。

そして『好きなところに掛けてくれ』と声をかけ、茶葉の入った急須に湯を注いだ。

「と、ところで一夏、あんたって一人部屋なの？」

「いや、私と住んでいる」

と、答えたのは俺じゃない。音も無く現れた箒だった。

てか、いつ帰ったんだ。『ただいま』くらい言えよ。びっくりするじゃないか。

「一夏は私と住んでいる」

お、二回言った。なんだ？重要な事なのか？

すると、急に空気が張り詰めた。心なしか淹れた茶が波打っているんだが、幻覚か？

おまけにゴゴゴという地鳴りまでする。幻覚と幻聴に襲われるとは、俺重病だな。今度医者に見てもらおう。

「へえ〜そうなんだ。じゃあ、私と部屋代わってくれない？」

と鈴。すると、箒の眉がぴくぴくと動いた。あっ、箒が怒ってる。理由は分らんけど。

「ふざけるな。なぜ、私がおんなのような事をしなくてはいけない」

「いやあ、篠ノ之さんも男と同室なんてイヤでしょ？気を遣うし。その辺あたしは平気だから」

「けっこうだ！別にイヤではない！その……い、一夏限定で、だがな」

え？最後何て言った？声が小さすぎて聞き取れなかつたんだけど。

てか、鈴が例のマイボストンバックを持ってきたという事は、始めからココに住むつもりで訪ねてきたのだろうか？だとすれば、なんでわざわざ俺の部屋に？部屋の設備は統一されているから、どこへ移っても大差はないはずなんだが………ふっ。さては鈴のヤツ同居人と一悶着やったな？

まったく、鈴は思った事をすぐ口にするから、人と衝突しやすいんだよな。なんて事を思っていると、二人の雰囲気がどんどん険悪になっていった。

「ともかく、あたしはどうしてもココに住みたいの。だから譲ってよ」

「断る！私もこの部屋が気に入っているのだ。譲る気は毛頭ない！」
熾烈を極める幼馴染の口論。このままだと押収がつかなくなりそうだし、何かこの場を収めるいい方法はないかだろうか………
あ、いい方法を思いついたぞ。

「鈴、そんなにココに住みたいなら、俺が部屋を変ってやるうか？」

ギロ！ 箒が睨む音
キツ！ 鈴が睨む音

なぜか、凄い眼光で睨まれた。それはもう、ライオンも逃げ出すんじゃないかってほどの。

あれ？俺が部屋を譲れば、箒は部屋を出なくて済むし、鈴もここに住む事ができて、万事解決だと思ったのに。一体、何が納得いかなかったのだろうか。まったく以って解せない。

そして、また始まる幼馴染の口論。

「そもそもだな。な、仲睦ましく暮らしている幼馴染の間に、いきなり割り入ってくるなど、無粋だと思わないのか」

「思わないわよ。あたしだって、一夏の幼馴染だもん。同居を主張する権利は当然あるわ」

「だが、付き合いは私の方が長い！なんせ小学生からの付き合いだからな。私の方が一夏の同居相手に相應しい」

「大事なのは時間じゃなくて、どうやって過ごしたかっていう密度よ。それなら断然あたしの方が同居相手に相應しいわ。だって、一夏と毎日バカやったもん」

「何を！ぐぐぐぐ」

「何よ！むむむむ」

まるで水掛け論だな。鈴は我が道を行く性格だし、箒も人一倍頑固だし。
まったく話が進展しやしない。こうなると話し合いによる和解は望めそうも無いな。

なぜ人はこうも解り合えないのか。

こうなるとあれだな、なんとか粒子とか、なんとかベイターの力が必要になってくるな。

どっかのガンダム（自称）さん、何とか箒と鈴を解り合わせてくれんかね？量子破裂とやらで。

『何くだらん事を考えている！！』『何バカな事、考えているのよ！！』

二人が見事にハモる。お前ら、そう時だけ意見が合うのな！！

つか人の思考を読むな。お前らはイノベーターか。だったら分かり合え！！相互理解しろ！！

「ともかく、あたしも今日からココで暮らすからよろしく！」

「ふざけるな。ここは私の部屋だ。出て行け！」

箒は眉をぐうつと吊り上げ、激昂する。だが、鈴はそんな箒を齒牙にもかけず、俺の方を見た。

「ところで一夏さ。約束の事覚えてる？」

「ええい、無視するな。こうなったら実力行使だ！」

業を煮やした箒は、ベッド脇に置いてあったバックから竹刀を抜き取り、鈴へと踏み込んだ。

こら、馬鹿！竹刀っていつでもお前の実力で踏み込んだら洒落にならねえぞ！

くそっ！俺は急いで鈴を庇いに出るが、間に合いそうもない。

バシントツ！

無情にも竹刀が振り下ろされ、空気の破裂音にも似た豪快な音が部屋に反響する。

「り、鈴！大丈夫か！？」

「大丈夫に決まってるじゃない あたし代表候補生よ？」

見ると、確実にヒットしたと思われた打撃は、鈴の腕に展開されたISの一部によって受け止められていた。

俺と直接手を下した箒は、その光景に目を剥く。

ISの展開は人間の反射速度に依存する。なぜなら、展開の判断を下すのは、他ならぬ操縦者自身だからだ。つまり、箒の一撃をISの展開で受け止めたという事は、鈴の反射速度が箒の剣速を上回ったという事になる。箒の剣術は全国レベル、並の剣速じゃなかったというに、だ。

うえ、これが代表候補生の実力か。すげーな。……………って感心している場合じゃない。

「今の、生身の人間だったら本当に危ないよ？」

確かに良くて打ち身、最悪骨折の危険も孕んでいた。箒の実力を知っている俺だからこそ、これは言い切れる。

「ぐっ……」

被害者側に正論を浴びせられたら、加害者の箒は黙るしかない。

まあ、ここで開き直らないのが箒のいいところだ。ちゃんと罪の意識を持ち、省みる事をする。

その前に怒りで自制心を見失わなければもったいいのだが、生憎、人間はそこまでうまく出来ていない。

「ま、いいけどね」

鈴はカラッととした態度で、展開したISの腕を解除する。瞬く間に華奢な腕が現れた。

その後、気まずい雰囲気は部屋を支配した。

箒はさっきの失態を引きずって無言だし、鈴は鈴で水を得た魚のようにフンと得意げな顔をしている。いよいよ、面倒なことになってきたぞ。何かいい打開策は………そう言えば、さっき約束がどうとか言ってたな。

「なあ、鈴。さっき言ってた約束っていうのは」

「う、うん。覚えてるよね？」

鈴は急に恥ずかしそうに顔を伏せた。そして、時より期待の籠った瞳でチラチラと俺を見てくる。

俺はく約束>というワードをもとに、過去の記憶をサルベージした。イメージとしては、たくさんの小さい俺が図書館を走り回っている感じた。

約束、約束。そう言えば、昔……

「もしかして、あれか。料理の腕前が上がったら、毎日酢豚を

」

「そ、そうっ！それ！」

「おごってくれるってやつか？」

確か小学生の頃にそんな約束をした覚えがある。

我ながらよく覚えていたな。凄いぞ、俺。偉いぞ、脳細胞。サルベージしてくれたミニー夏たちにも感謝だ。

「……はい？」

「だから、鈴が料理をできるようにになったら、メシをタダでご馳走してくれるって話だろ？」

なにしろ、タダだ。ありがたい事この上ない。やっぱり持つべきものは幼馴染　パシンっ！

唐突に乾いた音が木霊した。

え？俺、ぶたれた？

何が起こったか解らず、面を食らう俺。

状況を把握するため、辺りに視線を馳せると
ていた。

鈴が泣い

「……………バカ」

鈴は口を強く結び、瞳に目一杯涙を溜め込んでいた。俺を叩いたであろう右手は、血が滲みそうなくらい強く握られている。それでも気丈に振舞おうとしているのが痛々しい。

俺は頬の痛みも忘れ、狼狽した。それは筈も同じらしく、顔には出ていないが目をパチクリさせている。

「え、えつと……………」

俺は言葉を失う。かける言葉が見つからなかった。

「最つつ低い！！女の子との約束を覚えていないなんて、男の風上にも置けないヤツ。犬に噛まれて死ね！」

怒りの箆った瞳で、罵声を叩きつけてくる鈴。さすがに理由も解らず殴られ、罵倒されれば、俺もカッとなってしまう。でも、俺が何かを言うより早く、鈴は置いてあったポストンバックをひったくって部屋を飛び出していった。

開けられたドアがバタンと閉まる。

そこで俺は我に帰った。

でも、鈴が帰ってくる事はなか

「……何なんだよ、アイツ」

何が何だか解らない。俺が何をした。何を言った。約束だつてちゃんと思い出したじゃないか。褒められなくても、殴られる謂れはなかったはず。でも、なぜ、こんなに罪悪感が湧いてくるんだ。

「一夏、お前な……」

筈の呆れた声が聞こえてきたが、俺は聞こえないフリをした。俺は悪くない。でも、誰かの言葉を聞けば、俺が俺の正しさを信じられなくなりそうだった。

「悪い。今日はもう寝るわ……」

俺は適当に寝支度を済まし、ベッドに入る。そして現実から逃げるように頭から布団を被った。寝るにはずいぶん早い時間帯だったが、今日はさっさと寝て、全てを忘れしまいたかった。

（時間が解決してくれるだろ……）

瞼を閉じた俺の脳裏に、そんな楽観的な考えが過ぎる。

俺と鈴は幼馴染だ。今までくだらない喧嘩を幾度無くしてきた。その度、時間が解決してきてくれた。

きっと今度も時間が解決してくれるはず。早ければ明日、遅くても明後日には、いつもの通りの鈴が俺の前に帰ってくるはずだ。

だが、俺は後に知る。己の甘さと愚かさ。

第3話 特訓とぱんつと約束

T r a i n i n g p a n t i e s a n d

今回はラブコメっぽく書いてみたのですが、やっぱりラブコメは難しいですね。物語を悲しくするのは簡単なんですけど。

それはさておき、書いておいて何なのですが、鈴の『料理が上達したら毎日酢豚を食べてくれる?』という言葉がプロポーズという言葉に結び付けるのは、私的にちょっと無理があるんじゃないかなって思うのですよね。きつと、私も一夏と同じ誤解をしたいと思います。

アリス『大丈夫です。あなたに酢豚を作ってあげようなんて思う女性は無理ありませんから』

ですよね〜

第4話 悲しみにくれる猫 cats to lament (前書き)

今回は少し長めとなっております。では、ごっげ。

第4話 悲しみにくれる猫 cat's to l a m e n t

日が沈む夕暮れ時。食事を終えた私は、自室へ続く廊下を歩きながら、訓練機の申請時に貰った二機のISカタログを見比べる。

<ラファール・リヴァイブ>と<打鉄>。IS学園にはこの二機が訓練機として採用されているのだが、私はどちらを訓練用にレンタルするかで迷っていた。

「うーん。どちらにしましょうか」

汎用性が高く、装備が豊富なデユノア社製IS<ラファール・リヴァイブ>か。それとも強固な守りと刀型の近接兵装が魅力的な純日本製IS<打鉄>か。うーん。悩みますね。

「ねえ、<レッドクイーン>、ラファールと打鉄、貴女はどちらがいいと思います？」

《……………》

本来なら直ぐに二機の性能を比較し、的確な意見をくれるのだが、なぜか今回は返事がない。

もしかしてシステムエラーとかじゃないですよ？困りますよ、まだ何も仕事していないのに。

「あの、<レッドクイーン>？」

《……………》
ハニーには私以外のISに搭乗してほしくない

ようやく返ってきた言葉がそれであった。しかも、あからさまに不服そうな声。

どうやら、私が<赤騎士>以外のISに搭乗しようとしたから、機嫌を損ねたらしい。

機械が機嫌を損ねる。通常では考えられない事だが、<レッドクイーン>はただの人工知能ではない。彼女は喜怒哀楽という感情の起伏を有し、“なぜ怒るのか、なぜ笑うのか”という感情の意図まで理解している。だから、嫌な事があれば不機嫌になるし、嬉しい事があれば機嫌も良くなる。

システムの仕様としては不便かもしれないが、こういった喜怒哀楽が表現・理解できるからこそ、搭乗者の意思をしっかりと汲み取る事ができ、<コア>へと忠実に反映させられるのだ。

閑話休題。話を戻しましょう。

「貴女の気持ちは解らないでもないですが、<赤騎士>を公に使用できない以上、他のISに頼らざるを得ないのです。解りますよね？」

《状況は理解している。でも、搭乗してほしくない》

まあ、なんてワガママなISなのでしょう。まるで子供ですね。まあ、生まれて（ロールアウトして）からまだ7ヶ月ですし、子供といえれば子供なんですけど。

「じゃあ、せめて<コア>のダミー国籍が手に入るまで我慢してください。その後は貴女のこと聞いてあげますから。ね？」

《むう……》

＜レッドクイーン＞はわかったような、そうでもないような生返事で答えた。

私は勝手に『納得した』と結論付け、カタログに目を戻す。

「よし、ラファールにしましょう」

＜打鉄＞も捨て難いが、＜ラファール・リヴァイブ＞の多様な武装はそれ以上に捨て難い。それに篠ノ之さんは＜打鉄＞を使っていたから、バランスを考慮すると＜ラファール・リヴァイブ＞の方がいいだろう。

「では、＜ラファール・リヴァイブ＞と」

私はその場で持っていた申請用紙にチェックを入れた。

《ハニーの浮気者》

AIがやきもち焼いていますけど、そんなの知りません。

「後は装備をどうするかですよね」

＜ラファール・リヴァイブ＞の武装には、IS用ナイフから突撃銃、果てにはパイルバンカーまである。その汎用性の高さで武装の豊富さがラファールの強みであり、売りでもある。今度は、どの武器を装備させるか悩みどころだ。

「とりあえず主力武器は、対IS用40mm滑空砲《バウンサー》」

にするとして　　ん？」

私が自室の前に辿りつくと、見知った顔の女子生徒がドアの前で佇んでいた。

その少女は大きなボストンバックをクッション代わりにして、小さな肩を震わしている。

その姿はまるで捨てられた仔猫。それは2組のクラス代表　　鳳
鈴音であった。

「鈴？どうしたのですか、こんな所で？」

声を掛けるが、反応がない。活発な彼女らしくない様子に、私は嫌な予感を覚えた。

私は彼女の許に駆け寄り、顔を覗く。彼女の目は赤く充血しており、瞳はやけに潤んでいた。

もしかして、泣いていた？

「鈴？」

もう一度呼びかけると、彼女はハツとした。ようやく私の存在に気付いたようだ。

「アリス……」

「中に入ります？暖かいモノ用意しますから」

とりあえず、涙の理由は訊かず、彼女を自室に入るよう勧めた。

私の部屋の前に居たという事は、私を頼りにきたという事。なら、力になってあげないと。

「うん……」

私は力無い声で頷く鈴を部屋に招き入れた。

「何か飲みますか？」

鈴を部屋に招き入れた後、私はソファーにちょこんと腰掛ける鈴に問い掛ける。

「何でもいい」

うん。何でもいいというのが一番困るのですよね。

じゃあ、ミルクにしましょうか。仔猫に上げる飲み物と言えば、やっぱりこれでしょう。

私はマグカップに牛乳を注ぎ、電子レンジで温める。その間、沈黙が続いた。

「はい、どうぞ。熱いから気をつけてくださいね」

私は温まったホットミルクを差出し、向かいに座る。

鈴はちびちびとミルクを啜り出した。何度も言うが、その光景は本当に仔猫のようだ。

「鈴、よかつたら何があったのか、教えてもらえますか？」

鈴がミルクを飲み終え、落ち着きを取り戻したところで、私は本題
涙の訳にふれた。

「うん。実はちょっと一夏と揉めてね。でもね、悪いのは一夏なの。
アイツが約束を覚えていないから」

「約束？」

私がオウム返しのように聞き返すと、彼女は頬を赤くして俯いた。

「うん、実はね、小学校の時に『料理が上達したら、毎日あたしの
酢豚食べてくれる？』って約束したの」

「毎日酢豚を……」

毎日酢豚は重たいですね。間に杏仁豆腐とかを入れて欲しいところ
です。いやいや、そうじゃなくてですね、“毎日”って事はつまり

「それって遠まわしのプロポーズだったりするのですか？『毎日、
俺に味噌を汁作ってくれ』みたいな感じの」

鈴は耳まで真っ赤になった。どうやら見事的を射たようだ。

しかし『毎日酢豚』とは、変わったプロポーズですね。まあ、鈴らしいと言えば鈴らしいですけど。

「それで、あたしはそのつもりで言ったんだけど、でも、あいついたら『あたしが料理上達したら毎日、酢豚をおごってもらえる』って勘違いしていて……」

「なるほど。それが原因で喧嘩を？」

「ううん。喧嘩っていうか、あたしが一方的にひっぱ叩いて、出てきちゃったの」

「手を上げたのですか。流石にそれはやりすぎたのでは？」

「一夏に非がないとは言い切れないが、彼の事だ、悪気があった訳でもないだろう。」

「どうあれ、無闇に手を上げれば、温和そうな彼でも怒るのではなからうか。」

「でも、あたしにとっては大事な約束だったの！！それに絶対覚えてるって信じてたから、ついカッとなって……」

過去の思い出がフラッシュバックしたのか、彼女は枯れた花のように萎れていき、また目頭に涙を溜め込んだ。そして、すすり泣くように嗚咽を漏らし始める。

付き合い始めた日、初めてキスした場所、結婚記念日、エトセトラ。女は些細な出来事・約束を大事にする生き物だ。対して男は、そういった事にとことん無関心で無頓着である。だから、平気な顔で“忘れた”“覚えていない”と大切な想い出を否定する。それが女性にとつて酷く堪らない事だというのに。

だから、きっと鈴も身を裂かれる思いをしたはずだ。大事な思い出を、約束を、否定されて。

鈴は代表候補生である前に、女であり、人間だ。当然のように悲しんだり、傷ついたりする。

「辛かったですね。わかりますよ。私も女ですから」

私は鈴の隣に座り直し、彼女を抱きしめる。優しく、慈愛を込めて。

「泣いてください。泣いて、全て吐き出したらいいです。強がる必要はありません」

すると、鈴の中で何かの楔が外れ、彼女は声を上げて泣き出した。

私はそんな鈴の髪を母親のように優しく撫で続けた。彼女が泣き止むまで、ずっと。

それからどれくらいの時間が経っただろうか。永久にも感じたが、

刹那であったような気もする。
鈴の心の内に触れ、感傷的になっていた所為か、時間の感覚が曖昧になっていた。

「ねえ、これからどうします?」

すすり泣く声が吐息に変わり始めたところで、私は腕の中にいる鈴に問い掛けた。

こんな事があっても、彼女は今でも一夏の事を想っている。なぜなら、彼女の恋心は此れしきの事で醒めてしまうほど弱くないはずから。もし簡単に醒めてしまうような恋ならば、三年間も彼の事を想い続けてはいない。

だからといって、このままでいい訳ではない。いくら強い思いがあっても、行動を起こさなければ、何も変えることはできない。

「土下座……」

すると、私の腕の中で、鈴がボソツと漏らす。私は聞き間違えかと思ひ、鈴に聞き返した。

「土下座?」

「そう、一夏に土下座させる!」

すると、鈴はがばつと私の腕から離れ、充血した目で言い放った。

「あたしにこんな思いをさせたんだから、一夏に土下座させて謝らせるわ」

ぐっと拳を握り、意思表示する鈴。

泣いてすっきりしたのだろうか、その口調はいつもの天真爛漫な鈴であった。

「でも、鈴。一夏は約束を覚えていたつもりでいるのでしょうか？なら、素直に謝罪に応じるとは思えませんか？」

いや、そもそも無理矢理謝らせても、根本的な解決にはならないだろう。

そういうのは和解と呼ばないし、己が非を認めない謝罪など何の意味もない。

「じゃあ、どうしろっての？まさか、あたしから謝りに行けなんて言わないわよね？それは絶対にイヤ。あたしは悪くないもん」

「安心してください。そんな事は言いませんから。そうですね……」

私は思案する。本当は一夏が己の過ち 約束の誤認 に気付いてくれるのが一番なのだが、人間の思い込みというのは厄介なもので、それが正しいと思いつくと、よほどの事がない限りそれと改められない。

かと言って、私が間違いを指摘するのも何か違うし、鈴としても一夏が自身の力で思い出してくれた方が嬉しいだろう。

うーん、私自身、恋愛経験が豊富ではなので、これといって良い策が思い浮かばない。

「では、しばらく様子を見ましようか、もしかしたら一夏の気持ちに変化があるかもしれませんし」

もし、それでも進展がないようなら、私が仲直りできるよう裏で暗躍しましよう。

「さて」

ふと、時刻を見ると10時前になっていた。

IS学園では、原則10時以降の外出は認められていない。だから、そろそろ鈴を部屋に帰した方が良いのだが、妙な保護欲に囚われていた私は、ある提案を持ち出した。

「鈴、よかつたら泊まっていきませんか？」

寮外での外泊は許されないが、寮内での外泊は認められている。ただし、無断外出にならぬよう寮監に一報入れないといけないが、ベッドも空いているし、着替えの類もあのポストンバックの中に入っているだろうから、そっちの方も問題無いだろう。

私の提案に、鈴は『うん、そうする』と答えた。

「寮監には私から連絡を入れておきますから、鈴は先にシャワーを使ってください」

私は『ありがとう』という礼を背中できき、寮監の部屋に内線を繋ぐ。しばらくすると、聞き覚えがある凜々しい声が聞こえてきた。そういえば、IS学園の寮監は織斑先生でしたね。

『私だ、どうした？』

「今日、鳳鈴音さんが私の部屋に泊まるので、その連絡を」

『分かった。鳳だな……………もしかしてうちの愚弟が何かやらかしたのか？』

一瞬の間を挟んで、織斑先生がそう問い掛けてくる。その声音は教師というより保護者　姉のようだった。きっと『鈴の外泊に自分の弟が絡んでいるのでは？』と憶測したのだろう。さすが一夏の実姉、鋭いですね。

「いえ、そういう訳ではなくて、ただ意気投合しまして」

私は悟られないように平然を装いながら、そう答える。

織斑先生も忙しい身だ。要らぬ心配を掛けさせないようにしないと。

『そうか、ならいい。つまらない事を聞いたな』

そう言って、内線を切る織斑先生。

「仕事では生徒の心配、プライベートでは身内の心配。オンでもオフでも心労が絶えませんね」

私は彼女の心情を察しながら受話器を置く。

それからシャワーを浴びて、ナイトウェア　薄手の赤いワンピース　に着替える。鈴は黄色の生地に入肉球模様が入った可愛らし

いパジャマに着替えていた。また、髪を下ろしている所為か、いつもと違う愛らしさがある。私が『いつものツインテールもいいですけど、下ろした髪型も可愛いですね』というと、鈴は『そう?』と得意げに髪を靡かせてみせた。

そんな雑談を繰り返す事一時間。私たちはそれぞれのベッドに身体を埋め、眠りについた。

.....

.....

.....

「ねえ、アリス?まだ起きてる?」

それから暫くして、暗闇の中に鈴の音が響いた。

眠りかけていた私は、瞼を閉じたまま『ええ、起きてますよ』と答える。

「そう?.....」

と、そこで一度言葉を切り、鈴はなにやら口籠りながら続けた。

「えっと、あのさ.....よかったらそっちに行ってもいい?」

もしかしたら一夏の事を思い出して、人肌が恋しくなったのかもしれない。

私は『ええ、いいですよ』と了承し、枕を抱いて駆け寄ってきた鈴をベッドに招き入れた。そして、私と鈴は身を寄せ合いながらベッドの上に並ぶ。ベッドはくシングルだったが、鈴は小柄だし、私も体が大きい方ではなかったので、スペースに困る事はなかった。

それからしばらく沈黙が続いた後、私は鈴にある質問をした。

「ねえ鈴。鈴は一夏のどこが好きなのですか？」

悪戯半分、好奇心半分でそう質問すると、鈴の小さい肩がびよこんと跳ねた。

「な、なによ、急に！」

「少し気になって。言いたくないなら、別にいいですよ？」

「いや、まあ、そうね。自分の意思を貫こうっていう信念があるところかな。ほら、今、世の中は女尊男卑でしょ。大概の男は女の顔色を伺って弱腰でいるけど、あいつは女に媚びたりしないで、自分の意見をはっきりと言っの。そういう真っ直ぐなところは、素直にカッコいいなあと思う」

なんとなくだが、鈴の言いたい事が解った気がした。

確かに一夏には、そういう周りに左右されない強い意思を持っている。私も彼のそういうところは、素直にカッコいいと思う。

「後は、さりげなく気を遣ってくれる優しさも好きだし、たまに見せる子供っぽい笑みも好きかな。もちろん顔も好きだし、あの暖かい手も、優しい声も好き。あとは」

「ふふふ」

鈴があまりにも幸せそうに語るので、私は和み過ぎて、思わず笑みを零してしまった。

「な、なにが可笑しいのよ!？」

「いえ、鈴って本当に一夏の事が大好きなんだなあって思いました」

「そそそ、そんな、だ、大好きってほどじゃないわよ!！す、好きのちよっと上ぐらいよ!！」

「好きのちよっと上?ふふ、よく言いますね。プロポーズまでしたくせに」

プロポーズするのは、大好きな証拠、愛している印。

それをしてしまった鈴はもう言い逃れできない。言い訳は見苦しいだけだ。

「大好きなんでしょ?一夏の事が」

「う……そ、そうよ!！大好きよ!！あたしは一夏のことが大好き!！悪い!？」

ふっきたのか、それとも自棄になったのか、形振りかまわず、気

持ちを吐露する鈴。

その顔は、暗闇の中でも判るぐらい赤面していた。そんな彼女に、私は肩を竦めて言う。

「とんでもない。人を好きになることは素晴らしいことですから。今度はそれを一夏の前で言いましょう」

「バカじゃない！！そんな事したら恥ずかしくて、二度と一夏の前に顔出せなくなるじゃない！！」

「そう言いつつも寂しくなって、ひょっこり顔を出しちゃうのが鈴でしょ？」

「ぐっ……」

言葉に詰まった。ふふ、凶星ですか。まったく、鈴は可愛いですね。からかい甲斐がある。

「ところで、あんたは好きな人とかいないの？」

ふっ。さては私の好きな人を聞き出して、仕返する気ですね。でも、お生憎様。

「残念ながら、私は未だ恋というモノをした事ありません」

「だったら、さっさとしなさいよー！」

「そう言いますが、このIS学園でどう恋をしろと？」

IS学園の男女の比率は、ざっと見ても1対450。女が出会いを求めるには聊か環境が悪すぎる。

「さて、そろそろ寝ましようか。明日も早いですし」

私は追及を逃れるように布団をかぶる。鈴も渋々布団に身を沈めた。そして、私たちは『おやすみなさい』と身を寄せ合い、瞼を閉じる。かくして夜は更けていった。

< side : 一夏 >

時は流れ、五月初頭。鈴と喧嘩してから1週間になる。

あれからというものの、俺は鈴と一言も口を聞いていない。それどころか、俺を避けている節すらあった。教室へ会いにくる事はもちろん無いし、食堂で鉢合わせても露骨に背を向けられている。まるで他人行儀だった。

当初は時間が解決してくれるだろうと思っていたが、それは希望的観測だった。中には解決されず、逆に悪化するケースだってある。流石に俺もこのままでは不味いと肌を感じていた。

「はあ」

俺は、今日12回目になる溜息をつく。

ISの方は順調なんだけどなあ。人間関係と勉学の両立って難しい。

「そんな溜息ばかりついていると、老けますよ?」

アリーナのピットへ向かい途中、誰かに話しかけられ、俺は足を止めた。

「お、アリスか」

「どうも」

そういえばアリスって、最近鈴と仲がいいよな。メシ時もよく二人のツーショットを見かけるし。

よし、ここで会ったら百年目、いや、違うか。ともかく、ちょっと相談してみるか。

「丁度よかった。実はアリスに相談した事があるんだ」

「珍しいですね。なんででしょうか?」

「実はちょっと前に鈴とイザコザがあつてさ。それ以来ずっとシカトされてるんだ」

「ええ。知っていますよ」

え?知っているのか。そうか、鈴から話を聞いたんだな。じゃあ、話は早い。

「それでき。なんていうか、どうしたらいいのか、わからなくてさ」

「それなら大丈夫ですよ。貴方が思っているほど鈴は怒っていませんから」

「でも、滅茶苦茶シカトされているぞ？」

「鈴が貴方を無視しているのは、怒っているからではなく、単なる催促ですよ。鈴も意地になってしまっただけで、怒っているフリをして貴方の気を引こうとしているのです。なので、一言『ごめん』と心から詫言ければ、きつと許してくれると思いますよ？」

「でも、別に俺は悪い事をしたわけじゃないしなあ……」

「だから、自分は謝りたくない？」

そう、ちゃんと約束を覚えていたのだから俺は悪くない。だから、謝る義理もない。

「俺は頭を下げる事に躊躇はないが、謝る理由がないまま謝罪するのはお断りなんだ」

「でも、鈴は涙を流して泣いたのですよ？それでは謝る理由になりませんか？」

その言葉に俺はハッとさせられた。同時にあの時の憧憬が脳裏に蘇る。

「鈴は、女優のように涙を操れるほど器用な娘じゃありません。そんな彼女が流す涙には、深い意味があったはずですよ」

そつだ。鈴は器用な女じゃない。むしろ不器用で、感情を素直に表せないヤツなんだ。

その鈴が顔をくしゃくしゃにして泣いた。なぜだ？解っている。俺が、鈴を傷つけ、悲しませたからだ。なのに、俺は罪悪感に苛まれるのが怖くて、逃げ道を探すように『悪くない、俺は悪くない』と自分を正当化する術ばかり考えていた。

泣かした女を蔑ろにする。ないがし鈴の言った通り、俺は男の風上にも置けない最低野郎じゃないか。

「そつだよな。俺は鈴を泣かせた。それだけで十分謝る理由になるつてのに……アリスのおかげで目が覚めた。怒られた理由はまだわからないけど、俺、鈴に誠心誠意謝るよ」

「はい」

肩の荷が下り、身が軽くなった俺は、軽やかな足取りで第三アリーナへ向かう。

しかし、アリスに相談してよかったな。筈に相談しても『知るか、自分の起こした不始末だ。自分で解決しろ』とか言いそつだし。あと千冬姉も。

「しかし、謝るにしても、タイミングが問題だな」

謝るタイミングって、実は結構重要だ。間が悪いと状況が悪化する事もありえる。

しかも、今の俺は鈴に避けられている。謝罪の場を設けるにも一苦労しそつだ。

「大丈夫ですよ。鈴はあまり我慢強いタイプでもないですし、きっと案外向こうから『何で謝りにこないのよ』って言い寄ってきますよ」

「ありえるな、それ」

そう相槌を打ち、俺は第三アリーナAピットのドアのセンサーに触れる。すぐさま『指紋認証』と『静脈認証』が行われ、1秒待たずに開放許可が下りた。そして、ドアを開き、中に入る。

すると、部屋の中央で、例の当事者 鳳鈴音が立っていた。

「何で謝りにこないのよ、一夏！」

と仁王立ちして怒鳴ってつけてくる鈴。

聞き覚えのある言葉にアリスをチラリと盗み見ると、彼女は『ほらね』と言いたげ顔していた。

「え、っと、その……」

心の準備はしていたが、あまりに唐突だったので、俺は思わずタジタジとしてしまう。

俺が戸惑いながら言葉を探していると、アリスが肘で突いてきたわ、分かってるよ。

「あの、鈴。約束の事でお前を傷つけたのに、俺はお前の事をずっと蔑ろにしてた。その本当にごめん……！」

俺は頬を掻きながら、バツ悪そうに　　でも、誠意を以って頭を下げる。

すると、鈴も鈴で間の抜けた声を上げてきた。

「ふえ？あ、そのえつと……………ふ、ふん！許して欲しかったら土下座しなさいよ！！」

う、土下座。男として流石にそれは…………。でも、悪いのは俺だし。背に腹はかえられない。

その時、『鈴ッ』とアリスの声が飛んだ。ちらりと盗み見ると、アリスは『違うでしょ』という顔をしていた。

「鈴、一夏は一夏なりに約束について思い出そうとしたに違いありません。結果的には貴女を傷つけてしまいましたけど、悪気があった訳ではないのですから、土下座なんて強要しないで、寛大な心で許してあげたらどうです？」

そして、アリスは打って変わって、朗らかな声音で続けた。

「それに貴女の本心が、一夏の土下座を望んでいない事ぐらい、私にはわかります。ここは意地を張らず、素直になりましょうよ。ね？」

アリスがそう諭すと、鈴はしばし沈黙した後、バツの悪そうな顔で言った。

「そ、そうよね。一夏に悪気があったわけじゃないんだしね。その、今のはナシ。ちゃんと謝ってもらえたから、今回の事は全部水に流

すわ。それと。その、あたしこそ、殴ってごめんね」

鈴はどこか淑やか声音で、殴った事について謝ってきた。その言葉で心の中にあつた靄がすーと引いていく。胸の内が晴れるとはこの事だろうか。

「いや、もういいんだ。あれは俺が悪かったわけだし、気にしてない」

そう言うと、鈴も晴れやかな表情で笑った。その姿はいつのも天真爛漫な幼馴染、鳳鈴音だ。

そこで俺は改めて、約束の事について尋ねることにした。

「なあ、鈴。約束の事なだけどさ。俺何か間違っていたか？よかったら教えてくれよ」

もし、約束の内容を誤っていたのなら、改める必要がある。でなければ、俺はきつとまた同じ過ちを犯してしまうだろう。俺は不出来な人間だから。

すると、鈴はモジモジと狼狽しながら真っ赤になった。

「えっと、それは、あの……あれで。と、ところでさ」

「はぐらかさないでくれ。俺は真剣なんだ」

「うう〜えつとね、それは……」

「何をそんなに躊躇ってるんだ？ちゃんと謝ったんだから教えてく

れてもいいじゃないか」

うん、じゃないと納得できない。教えてもらえないなら謝罪を撤回するぞ？

「イヤ」

「へ？」

「イヤって言ったの。そもそも、なんで教えてないといけないのよ。自分で思い出しなさいよ！」

その言葉にプチンと何かが切れる音がした。それはおそらく堪忍袋の尾。

「何でだよ!!」

「説明したくないからよ！察しなさいよね!!」

こうなると売り言葉に買い言葉。仲睦まじかった雰囲気は、一気に険悪なムードになった。

今なら押収がついたが、俺も男だ。一度啖呵を切ってしまったら、そう簡単に引き下がれない。

「はあ〜二人とも落ち着いてください」

そう宥めてきたのは、俺たちのやり取りを見兼ねたアリスだ。

彼女は苦笑を浮かべながら、俺たちの仲介に入った。

「相談を受けた私ですから、鈴の話したくない気持ちは分かります。でも、一夏の言う事もごもつともです。なので、こういうのはどうでしょう？今週行われるクラス対抗戦で、もし一夏が勝ったら、鈴がちゃんと説明をする。ただし、鈴が勝ったなら、一夏は自分の力で“約束”について思い出す。これなら公平じゃありませんか？」

それはいい提案だ。これ以上口論を交わしても埒が明きそうにないし、四の五言より分かりやすい。

「ああ、いいぜ」

「いいわ。望むところよ。怖気づいて逃げ出さないでよね、一夏」

「俺は男だぞ。誰が逃げ出すか、馬鹿」

「馬鹿とは何よ、馬鹿とは。この朴念仁！マヌケ！アホ！馬鹿はあんたよ」

むかつ。こいつ言わせておけば……

「うるさい、貧にゅ」

ガッシャーン、と突如、部屋を揺るがす轟音が部屋に木霊した。

恐る恐る音のした方向を見遣ると、鈴のISが超合金製の壁を陥没させていた。

トラックの衝撃にも耐えられる壁が陥没する。ちよつとそれ洒落になってなくない？

「あんだ、言ったわね。絶対言ってはならないタブーを」

そうだった。鈴は胸の事を気にしていた。コンプレックスを悪く言われたのだから、怒って当然だ。今のは全面かつ完全に俺が悪い。

「すまん。今のは俺が悪かった」

「今の“は”！？今の“も”よ！！いつだってあんだが悪いんだから！！」

見も蓋もない事を言われるが、今の俺に反論の余地はない。ただただ耳を傾け、頷くだけだ。

「少しは手加減してあげようかと思っただけど、もう許さない。ボコボコにしてやるから覚悟しなさい！」

そう言っただけで、怒気を纏わせながらピットを飛び出していった。

ああ、これでまた謝らないといけないな。でも、先に謝らないといけない人物がいる。

「アリス……その、すまん」

せつかく仲直りのアドバイスをくれたのに、見事台無しにしてしまった。本当に彼女には顔向けできない。

「いいですよ。その言葉は鈴の為に取っておいてください」

しかし、アリスは苦笑するだけで咎めたりはしてこなかった。それどころか、

「それより、がんばって鈴に勝ちましょう。そして、怒られた理由を聞いて、元鞘に戻るのです。その為には特訓ですよ、特訓。なんせ鈴は中国の代表候補生ですからね。私も力及ばずならお手伝いします」

と、俺にISSスーツを押し付けてくるアリス。

そんな彼女の好意が心に染み、柄になくジーンとしてしまった。でもさ、

「それは心強いが、いいのか？協力を受けたら、フェアじゃない気がするんだが」

「いいですよ。誠意を以って謝った貴方には、殴られた理由を知る資格があった。なのに、鈴は意地を張ってそれを拒んだ。だから今回は貴方の味方をします。それに代表候補生である鈴と貴方との実力差は月とスッポンですから。適性値C+の私が手を貸したぐらいじゃアンフェアにはなりませんよ。むしろ、これでようやく対等なっただくらいです」

「やっぱり、そうなのか」

厳しい現実を突きつけられた気がするが、俄然やる気が湧いてきた。

「じゃあ、アリス、よろしく頼むぜ」

「ええ。漁船に乗ったつもりでいてください」

微妙だ。すごく微妙だ。荒波がきたら転覆してしまいそうだ。

「そこは景気付けに『イージス艦に乗ったつもりでいてください』
くらいの事を言ってくれよ」

「私は適性値C+ですから。そんな大口叩けません。えっへん」

叩けないなら威張るなよ。それでも、凄く頼もしく見えるから不思議だな。

こうして、俺は打倒・凰鈴音に向けて、アリスと秘密の特訓を開始するのだった。

第4話 悲しみにくれる猫 cat's to lament (後書き)

本当は『一緒にお風呂』まで書きたかったんですけどね。カットしてしまいました。部屋にシャワーしか設置されてない事を思い出しので。でも、いつか機会があれば、書きたいものです。福音編とかで。

そして、次回。お話はちょっと回り道してから、クラス対抗戦になります。一夏VS鈴です。この小説では初めての戦闘シーンになります。書けるか不安ですが、がんばります……

アリス『不安なら私がアグレッサーを勤めてあげましょう。リアルな戦闘を体験すれば、少しはマシな描写が書けるようになるはず』

アリスさん、危ないからその赤いナイフを下ろしなさい。

第4・5話 闇にて Dark Side

その場所はプラネタニウムに似ていた。

半球型の天蓋を漆黒より黒い闇が覆い尽くし、あらゆる場所に色彩豊かな光が鑲められている。擬似的な宇宙^{ソラ}とはいえ、その壮大さと美しさを垣間見た時、人は自分という存在がいかに矮小であるかを思い知る事だろう。

「諸君、よく集まってくれた」

しかし、そう言った少年は、そんな空間の中でも圧倒的な存在感を放っていた。

その少年は、闇を身に纏うかのように頭頂から爪先まで真っ黒であった。そして、蒼く澄んだ瞳は、我が母なる星　　<地球>を彷彿させる。

その神々しさすら感じさせる様は、唯一にして絶対、万能にして全能である神のよう^{デオス}であった。

「では、今宵も<夜会>を始めるとしようか」

少年は響きの良い声音で、設置されていた円卓のテーブルに向かって開会を告げる。

すると、円卓を取り囲んでいた座席に次々と人影が浮かび上った。その数は十二。人種、性別、年齢は実に様々。男が居れば女もいる。

白人が居れば黒人もいるし、若者がいれば老人もいた。一つの円卓を複数を取り囲むその体裁は、さながら<円卓の騎士>のようだ。

その“十三人”は、それぞれ腰を上げ、各自少年に敬意を表す。それは、軍隊式の敬礼であったり、民族の挨拶であったり、中には投げキッスをしてくる女性もいて、三者三様であった。

それぞれの挨拶を受け取った少年は、『掛けてくれ』と着席を促し、自身も自席に坐す。

「それで、さつそくだが、俺から報告がある。前より開発を進めていた『Plan1072』についてだ。先日、稼動テストが終了し、残すのは実戦テストのみとなった。それでだ

そこで少年が指をパチンと鳴らす。すると、円卓の中央に巨大な地球儀が現れた。

それは回転しながら、アジア、日本、関東、と、ある一点を目指してズームインし始める。やがて、スクリーンがとある建築物を映し出されたところで、それは止まった。

その建築物は、中央に聳え立つタワーが印象的で、敷地面積は東京ドーム数個分に値するだろう。

それは、誰もが知る世界的重要施設
IS学園の一角であつた。

「皆、この施設はご存知だろう。そう、ココは世界が誇るISの最高学府『IS学園』だ。ここには、あらゆる操縦者が集い、様々な機種が揃っている。加え、法の埒外だ。まさにISの実戦デ

ータを取るには最良の場所といえるだろう。そこで《Plan1072》の実戦データもココで収集しようと思う。皆、どうだろう？」

少年が十三人の人間に意見を請う。だが、誰一人として異論を唱える者は現れなかった。

その場の意見が一致したとみるや、円卓の一角に座っていた女性が口を開いた。

「では、さっそく実行部隊からテストパイロットを抜擢して、入学の手続きを」

その女性はビジネススーツを着こなし、銀縁の眼鏡を掛け、ブラウンの髪を後頭部でアップにしていた。その格好は、やり手の秘書といった印象で、それはあながち外れていなかった。

「その必要はない」

しかし、少年は手をひらつかせ、秘書らしき女性が出した提案を即座に却下する。

入学手続きの必要がない？言葉の意図を理解しかねた秘書は、少年に問いかけた。

「では、どのような方法で？」

「ISS学園を襲撃して、否応無しに《Plan1072》と戦わざるを得ない状況を作り出す。そちらの方が、チマチマとデータ収集するより効率がいい上、より実戦的なデータが手に入るだろう？」

その言葉が発せられた途端、十三人の顔に驚嘆の色が灯った。

世界の重要施設である『IS学園』を襲撃する。正気の沙汰とは思えない提案に、一人を除き十二人全員が眉を潜める。中には、彼の浅慮を嗤うように顔も見合わせる者もいた。

「御言葉ですが、IS学園は世界の重要機関。そんな事をすれば、世界を敵に回します」

すると、部屋の一角に座っていた初老の男が、十三人を代表するように意見した。

その声音には有無を言わさぬ威厳さが含まれていたが、少年は意に介さず、せせら笑う。

「何だ？怖いのか、イワン。ロシア連邦軍の大佐ともあろう男が肝っ玉の小さい事だ」

「……………」

「まったく、お前がそんな弱腰だから、極東の女に国家代表の座を奪われるんだよ。本来ならお前の娘が代表に選抜されるはずだったんだろ？お前が然るべき態度に出していれば、極東の女に好き勝手さななかっただろうに。なんなら、俺がその女を代表の座から引き摺り落としてやろうか？」

少年はそこで初めて年齢相応の笑みを見せた。しかし、そこに少年特有の幼気さはない。

あるのは、甘い囁きで人を惑わせ、墮落させようとする悪魔の笑み。

「まあ、そんな話はどうでもいい」

少年はそこで話を翻した。

「なあ、イワン。俺は浅ましい正義で卑しく保身を図ろうとするこの世界に厭き厭きしていてね。特に“女尊男卑”というのが気に食わない。なんだ『ISを使える女は偉い』って。何も成し遂げていないくせに偉人気取りか？俺に言わせりゃ、そんな事で威張っている女より、募金箱に少ない小遣いを入れているガギの方がよっぽど立派だと思いがね。まったく、“女尊男卑”は無能な女を肥やすだけのイカれた社会だよ」

そこで、少年の鋭い眼差しが、ロシア人の男性に強く突き刺さる。

「知っているか、イワン？『女性優遇制度』を取り入れている先進国がなんて呼ばれているか？」

「いえ、なんと？」

「不勉強だな。第二のアフリカだよ。理由は、『女性優遇制度』の女性保護プログラムが、アフリカの人種隔離政策『アパルトヘイト』へと変貌しつつあるからだ。アフリカで白人が非白人に対して悪辣な差別政策を取ったように、先進国では女が男に対して悪辣な差別政策を取っている。世界を牽引すべき先進国が差別社会を容認し続けるようなら、世界に未来はないな」

もし、このまま10年、20年、ないし50年、この女尊男卑が続ければ、男女間の確執は埋め難いものになっていくだろう。

そうならば、人類は衰退の道を歩むしかない。なぜなら、人は、男と女が手を取り合い、子を為すことで未来を紡ぐのだから。

互いを尊重できず、仲違いを続ける世界に未来などない。そう、“女尊男卑”は緩やかに世界を終わらせる。

なのに、世界はその未来を予測していながらも、“女尊男卑”をなくす取り組みすらしていない。

世界がやっている事といえば、富国強兵、軍備増強、諜報合戦、ISの開発競争、有力操縦者の暗殺という『それで誰が幸せになるんだ？』と問い掛けたくなるような茶番ばかり。

まったく、そんな事よりやるべき事があるというのに。

「だから、俺はこのどうしようもない世界を変えてやろうと思う

コイツを使ってな」

少年が手を翳すと、その手に黒い　　あたかも暗黒物質ダークマターで構成されたような結晶体が現れた。

「コイツは世界を滅ぼす第二の核兵器カタストロフだ。今やコイツ一つで世界のパワーバランスが一変する。だが、世界にはコイツが467基しか存在しない上、新たに製造する事も不可能な状態にある。しかし、

だ。今、俺の指先にあるコイツは468基目のコアだ。その意味が解るな？俺はコイツを使つて世界を変革する。かつて、篠ノ之束が世界に対して、そうしたようにな」

世界を変革する。本来なら若輩者の世迷言か、狂人の誇大妄想だと一蹴するところだったが　　できなかつた。少年の放つ“霸王”ともいうべき貫禄が、与太話に真実味を与えている。

「つまり、俺には世界と戦う覚悟と、力があるという事だ。だから、俺は世界を敵に回そうが構いはしないのさ」

そこで少年の蒼い瞳が凄みを増した。

「さあ、それを踏まえて選べ。俺と組んで世界と戦うか、尻尾を巻いて祖国に帰るか、を」

少年の深海のような深く重い瞳が、初老の老いた碧眼を捉える。

初老の体格はまさに軍人という井出立ちであり、風格もそれにそぐう雰囲気醸し出している。

普通に睨み合えば、少年が引き下がるのが道理。しかし、身を引いたのは初老の男だった。

「私は此処に残り、貴方に従います」

初老の男は畏まりながら、少年にそう告げた。

けして、少年を恐れた訳ではない。ただ魅せられたのだ。瞳の奥に秘められた強い野心に。

彼に付いていれば、恐れるものは何もない。そう信じさせるに足るモノが少年にはあった。

「次は皆に問おう。俺に従うか否かを」

再び、少年が十三人に意見を請うが、誰一人異論を挟まない了承の沈黙であった。

皆が皆、彼の貫禄に支配されていた。最早、彼を若輩者と嗤う者は、この部屋にいない。

「諸君、賢明な判断だ。俺はうれしいよ。お前たちのような理解のある同胞を持って」

少年は満足そうに目を細め、掌のクリスタルを手品のように消す。

「では、仕切り直しといこう。それでだ」

そこで、また声が掛かった。

「あの、よろしければ、《Plan1072》のテストパイロットに私を起用していただけませんか？」

と、申し出たのは、紅い髪の可憐な少女だった。

歳は17あたりだろうか。大人の色気と少女のあどけなさが見事に同居している。服装はヴィクトリア朝時代を彷彿させるゴシックドレスを身に纏っていた。更に、腰には燃え焚ける炎のような剣くフランベルジュを携えている。

傍目から見ればかなり奇抜で時代錯誤な格好だったが、彼女が纏っていると思議と違和感がなかった。

むしろ、額縁に入れて飾っておきたいほど、絶妙に容姿と衣装が調和している。

「いや、ダメだ」

しかし、少年はそんな少女に一瞥もくれることなく、容赦なく一蹴した。

それでも少女は、紅い髪を振り乱して食い下がる。

「自惚れではありませんが、学生程度に遅れを取るような事は」

「そうだな。君は次期くブリュンヒルデの最有力候補だ。初代が出てこない限り、誰も君を止められないだろう。だが、《Plan 1072》は、自動人形オートマトンによる無人での稼動を前提にしたISだ。有人では求めている稼動データを収集できない。言っている事は解るな？」

「はい……」

少女は表情を変えずに答えるが、心なしか表情は無念そうだった。どうやら、少年に好いところ見せ損なっただのが、よほど堪えているらしい。

その僅かな変化を読み取った少年は、嘆息を付きながら言った。

「そうがっかりするな。出番は後からいくらでもある。〈魔剣〉が
実用段階になればな」

「魔剣……?」

「第四世代型ISの開発コード《Plan3000》系統のことだ。
コイツが実用段階に入れば、嫌ってほど働いてもらう事になるから
な。期待しているぞ、ローズマリー」

「はい?」

少年の期待の籠った視線を向けられ、少女は思わず場の状況を忘れ、
破顔した。

少女を除く十二人は、熱の帯びた頬で答える少女をヤレヤレといっ
た面持ちで見つめる。

そして、揃いも揃って同じ感想を漏らしていた

織斑千冬をして、唯一の対抗馬と謳われている少女も、ただ
の恋する乙女ということか、と。

もちろん、口に出すのは憚れる。自分たちとて彼に魅せられた人間
の一人だから。彼女にとやかく言える権利などない。

「では、今度こそ、具体的なプランの説明を行う」

そして、世界変革のためのシナリオ そのプロローグとなる文
脈が少年によって綴られる。

この時、世界は、明日も、明後日も、何もかわらない日々を送れると、信じている事だろう。

だから、世界は知らない。闇の亡霊たちが世界を貶めんと、水面下で嗤っている事を。

それはきつと遠くない未来。秩序が塗り替えられる時、世界に落日が訪れる。

第5話 龍を狩る者 Dragon Slayer

クラス対抗戦当日。天気はこれ以上ないぐらいの快晴。絶好のIS日和だ。

まあ、ISは天候に囚われるほど繊細なものではないので、雨でも雪でもIS日和なのだけだ。

私は観客席から試合会場であるアリーナ周辺を見渡す。

他の生徒の影はない。当然だ。今の時間帯、アリーナは生徒にも関係者にも開放されていない。

なのに、なぜ入れたのか？答えは簡単。教師側の諜報員「エイダ」に頼んで、スタッフ用の裏口からこっそり入れてもらったのだ。そう、見晴らしのいい席を逸早く確保するために。

ズルイやり方かもしれないが、私はこの学園に物見遊山で来た訳ではない。あくまで密偵としてきているのだ。もし、私の代わりに報告書を提出してくれるのなら、喜んでこの席を譲りますよ？

という訳で、私はアリーナの観客席の中でも、とびつきり見通しのいい席に座った。

開場まであと10分弱。まだ時間があるので、少し余談でもしましょうか。

実は、アリーナの特等席を指定席として売ろうとした学生がいましたね。もちろん、その生徒は然るべき処罰を受けたのですが、購入

しようとした生徒は大勢いたそうです。理由は、学園のアイドル的存在“織斑一夏”が出場するからだと聞きました。いやはや織斑人気は凄いですね、姉弟揃って。

「さてと」

私は朝食代わりのカロリーメイトを啜えながら、事前に配布されていた試合表を広げる。

「いひなひ、いふかたひひんでふか（いきなり一夏対鈴ですか）」

第一試合目から専用機持ち同士の戦い。まさに“最初からクライマックス”だ。

「もぐもぐ（一夏は勝てるでしょうか）」

これは全くの私情だけど、私は一夏に勝って欲しいと思っている。なので、彼に少しだけ力を貸した。具体的には、イグニッションブースト瞬時加速の使い方をレクチャーしたのだ。

イグニッションブースト瞬時加速。ゼロリアクトターンの初速からトップスピードを引き出すISの高等移動術の一つだ。

オルコットさんは一夏に、ゼロリアクトターンの無反動旋回やクロス・グリッドターンの三次元躍動旋回を教えたが、もちろんそれが必要な技術だけど、今の一夏、いや<白式>に必要なのはこれなのだ。

<白式>にはバリアを無効化できる武装《雪片式型》がある。しかし《雪片式型》は近接戦用装備なので、白兵戦でしかその力を発揮できない。そうになると“いかにして相手との間合いを詰めるか”が

重要となってくる。そこで有効な策の一つが瞬時加速だイグニッションブーストという訳だ。瞬時加速は、その特性から強襲や奇襲に用いられる。なので、この移動術をうまく使いこなせれば、〈白式〉の勝率は、格段にあがるはずなのだ。

が、しかし

「それでも勝率は50%あるか、ないか」

一夏が瞬時加速イグニッションブーストを使いこなしたとしても、勝率はイーブンといったところだ。

なぜなら、私たちは鈴の技量も、彼女が駆るISの特性も全く熟知していない。それは間違いなく一夏の不利に働くだろう。最悪、相性が悪ければ、勝負にならない可能性もある。

「ふふ、これは面白くなりそうですね」

勝敗が決まった試合など見ていても面白くない。高まる興奮と期待に自然と笑みが零れた。

「ねえ、レッドクイーン、貴女はどちらが勝つと思います?」

《Yes My honey おそらく鳳鈴音》

「ほお、その根拠は?」

《〈専用機持ち〉という情報から鳳鈴音が搭乗するISは、おそらく第三世代型と予測される。なら、白式と対等に渡り合えるだけの

スペックは満たしているはず。となると、勝敗を分かつ条件は操縦者の技量。凰鈴音は代表候補生であるため、ISの稼働時間、模擬戦数、実戦数、どれを取っても織斑一夏のそれを大きく上回っていると思われる。だから、勝者は凰鈴音と予想。ただし、武装などの不確定要素を考慮していないため、正確性は欠く》

「なるほど、貴女らしい考え方ですね。じゃあ、私は一夏が勝つ方に一票入れましょう」

《Yes My honey その根拠は?》

「一夏は、鈴と同じ経験値を持つであろうオルコットさんとあと一歩のところまで追い詰めています。それは、彼の潜在能力ポテンシャルの高さを示す何よりの証拠。きつとISの稼働時間云々では決まりませんよ。あとは彼に勝つて欲しいからですね」

《Yes My honey なら、私も織斑一夏が勝つ方に一票投じる》

「あら?意見を変えるのですか?優柔不断ですね」

《No My honey 貴女の願いは私の願い。貴女がそう望むなら、私もそう望む。パートナーとはそういうものでは?》

「ふふ、そうですね。じゃあ、一緒に一夏を応援しましょうか」

《Yes My honey 御心のままに》

私が最後のカロリーメイトをかじると、観客席のシャッターが開いた。同時に生徒たちが雪崩のように流れ込んでくる。瞬く間に生徒

で席が埋まっていくその光景たるや、まるで椅子取り合戦のようだ。その後もぞろぞろと人で溢れ返っていく。

「実はあたしさ、この特等席を手に入れる為に、入り口で二時間並んだんだよね。その甲斐あって一番乗りよ、ふふふん」

と、ひとつ上の階で、どこかのクラスの女子生徒が誇らしげに呟いた。

二時間とはご苦労様です。でも、残念でしたね。一番乗りはこの私です。

それからしばらくして、ポンポンと音だけの花火が上がった。

それはリーグマッチの開会を告げる合図。かくして、クラス対抗戦は幕を挙げたのだった。

<Side:一夏>

第二アリーナ第一試合。組み合わせは鈴と俺。初端から因縁の対決となった。

「さて」

俺は開始の合図が出るまでの間に、グルッと観客席を見渡す。

噂の新生入生同士の試合とあって、観客は全席満員だった。それどころか、通路まで立っている生徒で埋め尽くされている。会場入りできなかつた生徒や関係者はリアルタイムのモニターで観戦するそう
だ。

「お、アリスだ」

ふと観客席を見回していると、アリスの姿を見つけた（なんせ紅髪だからよく目立つ）。

ちなみに箒とセシリアは、ピット内にあるモニタールームから俺を見守ってくれている。

俺は試しに腕を上げ、手を振ってみた。すると、アリスもそれに気付いてくれたのか、手を振り返してくれた。

（アリスの為にも負けられないな）

アリスは俺のために、イグニッションブースト瞬時加速と呼ばれる移動術をレクチャーしてくれた。更に《雪片式型》の先代である《雪片》の担い手“千冬姉”の試合映像を『戦術の参考資料になれば』と、わざわざ集めてきてくれたのだ。

結果的には、あまりに高度な技術ばかりだったので、ほとんど参考にならなかつたけど、本当に至れり尽くせりだったな。

（ああ、そつだ。ここまでしてもらって負けたら男が廃すたるつてもんだ）

自分を奮い立たせた後、俺は対戦相手である鈴のISへと視線を移

した。

鈴の専用機は、非固定浮遊部位が特徴的なISだった。肩についた棘付き装甲がやたら攻撃的な主張をしている。〈白式〉の解析によると。機体名は〈甲龍^{シエンロン}〉というらしい。

なんかシエロンと聞くと、7つ集めると出てくるアレを連想するな。なんかしっくりこないし、俺はアレを『こつりゅつ』と呼ぼう。漢字だし、いいだろう。よし、あれは『こつりゅつ』だ。

<それでは両者、指定の位置まで移動してください>

俺はクラスの声援を背中に受けながら、アナウンスの指示でアリーナの中央へと赴く。

両者の間合いが10m辺りになったところで、鈴が開放回線オープンチャネルでコンタクトを取ってきた。

『一夏、今謝るなら少しぐらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ?』

「いらねえよ、そんな優しさ。それよりこれは真剣勝負だ。全力でこい!」

これは強がりじゃない。俺は勝負で手を抜くのも抜かれるのも大嫌いだ。全力を出し切ってこそその勝負。手抜きの手抜きの勝負なんざ勝負じゃない。だから、俺が嫌いなモノは接待ゴルフ。

『言っじゃない。そうよね、やっぱり勝負はそうじゃないと。今のは撤回するわ』

鈴が感心したように言う。どうやら俺の信念が通じたようだ。これで心置きなく戦える。

< それでは、両者、試合を開始してください >

ピー！と開始を告げるブザーが鳴り響く。そして、闘いの火蓋は切って落とされた。

俺と鈴の最初の初動は、ほぼ同時だった。

俺は瞬時に《雪片式型》を展開。鈴も“何か”を展開し、俺へと肉薄してきた。

眼前に迫る攻撃を、俺は寸前のところで受け止める。

ガキーン

受け止めたそれは黒い青龍刀だった。いや、青龍刀と呼ぶにはあまりにも歪な形をしていた。

刀身の幅は、鈴の身体を覆っても十分過ぎる広さがある。柄も両手で握って余るか余らないという長さ。それは最早、青龍刀と呼ぶより包丁と形容した方が近いかもしれない。

< IS情報：甲龍専用近接武装《双天牙月》 >

受け止めてから少し遅れて、青龍包丁の情報がウィンドウに表示される。

しかし、確認している余裕など、俺にはなかった。

「くっ！」

でかい刀剣なだけあって威力も相当だ。《雪片弐型》だけで受け止めるには、無理があった。

不味いな、このままじゃ押し切られる……。

俺はセシリアに習った三次元躍動旋回を駆使して、鈴との鏝迫り合いを脱する。

鈴はそんな俺を追おうともせず、感心したように鼻を鳴らした。

「ふうん。やるじゃない、初撃を防ぐなんて。でも、次はそうもいかないわよ」

そうやって鈴は《双天牙月》をもう一本展開。それらを連結させ、オールのような形状にする。

「いつくわよっ！」

そして、ミキサーのような回転を加え、俺へ斬りかかってきた。

俺は《雪片弐型》を正眼の構えで持ち、左右から迫る斬撃をなんとか凌ぐ。そこからは、防戦一方、逃げの一手という無様な展開となった。

何とか状況を脱しようにも、遠心力による威力の増加と、微妙に斬撃の角度を変えてくる鈴の技術で、攻撃に転じられるスキがない。

シールドエネルギーも微量ではあるが消費していた。

このままでは“切り札”
が使用できなくなる。

イグニッションブースト
瞬時加速と《雪片式型》の併用攻撃

この併用攻撃は、通常より膨大なエネルギーを消費するため、シールドエネルギーを大目にストックしておく必要がある。それが確保できないようになれば、ジエンド。後はネコに掴まったネズミの如く、飛ばされるだけだ。

(仕方ねえ、一回距離を取って体制を……)

俺は背中を預けるように機体を傾け、スラスターを噴かす。そして甲龍から距離を

「甘いつー!」

すると<甲龍>の肩のアーマーが開き、その中央が黄金色に輝いた。

その輝きに俺はぞっとする。

案の定、俺は見えない何かに殴り飛ばされ、一気に高度を失った。

俺は地面寸前のところで体制を立て直し、鈴を見上げる。

な、何だ今の攻撃。銃撃でも斬撃でもなかった。本当に何かに殴られたような衝撃だったぞ。

「今のジャブだからね」

今の威力で牽制かよ。もし本命なんて喰らったら、それこそKOしちまうんじゃないか？

そんな俺の予想は見事に当たってしまった

ドォーン！！

まるで巨人に殴られたかのような衝撃が全身を駆け抜け、一瞬、目の前が真っ黒になった。

「くっ！」

俺は頭を振り、何とか意識を繋ぎ止める。

その側で、P i P i P iと音を立てながらエネルギー残量の数値が大きく激減していった。

「まずいな、これ……」

俺の額に冷たい汗が流れていった。

「なんだ、あれは!？」

アリーナのモニター室。画面を食い入るように見ていた筈が、驚愕の声を上げた。

「衝撃砲ですわね」

その疑問に答えたのは、同じ室内に居たセシリアだった。

「衝撃砲。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、その余剰で生じる衝撃を砲弾化して打ち出す兵器ですわ。それに先の一撃を見る限り、あの衝撃砲には砲身斜角の制限がないようですわね」

と、<甲龍>の武装について淡々と語る様は、さすがイギリスの代表候補生というべきだろう。

しかし、箒がその知識量や勤勉ぶりに感心する事はなかった。今、彼女の胸の内を占めていたものは、ただ一つ

(一夏、無事でいてくれ)

一夏の安否、ただそれだけだった。

箒はまるで祈るように手を合わせ、モニターを見守り続ける。その姿を『戦に赴いた良人を待つ妻』と形容したら彼女は怒るだろうか。

また、その隣でもモニターを食い入るように見る人物がいた。一夏の実姉、千冬である。

こちらは『部下の無事を祈る上官』という面持ちだった。彼女もまた弟の安否を少なからず案じているのだろう。

(へマをするなよ、一夏)

そうエールを送る彼女は“教師”ではなく“姉”であったが、それ

を指摘する者はこの場にいなかった。

<Side：アリス>

「衝撃砲……。あれが<甲龍>の第三世代型兵器ですか」

私は目を細め、猛威を振るう鈴のISを睨みつける。まさか、空間圧兵器を積んでいたとは……

確か衝撃砲は、砲身も砲弾も視認できないのが特徴だったはず。これは非常に厄介だ。

まず、砲身が見えないと弾道予測ができない。加え、砲弾まで見えないとなれば、防御のするのも困難だ。そして何より外部情報の約7割を視覚に頼る人間にとって“モノが見えない”という事は、まさに恐怖そのもの。その恐怖が人の思考を半歩遅らす。

そこへ鈴の代表候補生としての実力が加われば、まさに鬼に金棒、テロリストに核兵器だ。

<甲龍>と凰鈴音。ルーキーの一夏には、厳しい相手かもしれない。でも、勝機はある。

（一夏、焦らないでください。衝撃砲にも弱点はあります。空間圧兵器には待ち時間ウエイツが必要。威力の高い衝撃砲なら、それに比例してインターバルも長くなる。だから、発射前にはどうしても隙が生じ

る。そこを狙えば勝機はあります。だから、怯えず、気を強く持つてください)

私は一人心中でそう呟きながら、一夏を見守る。

戦局は次のステージへ移ろうとしていた。序盤から中盤へと。

<Side:一夏>

俺はただ逃げるように鈴の砲撃を掻い潜り続けた。しかし、代表候補生の名は伊達じゃない。確実に動きを先読みして攻撃を当ててくる。少しずつだが、確実に追い込まれていた。

ドゴーン！

これで7発目。そろそろエネルギーの残量が心許なくなってきたが、損傷は軽微。まだいける。

と、俺は冷静に状況を整理する。徐々に追い詰められつつあるが、頭の中は至ってクールだ。

鈴は強敵だし、甲龍は強力だ。その二つが合わせているのだから、状況は絶体絶命といっていい。なのに、なぜ冷静でいられるのか？ 決戦前夜、アリスがくれた言葉が、俺をそうさせていた。

『一夏。戦場に置いて最も必要なのは、優秀な技術でも、巧妙な戦術でもありません。それは、強い心　すなわち、折れない精神です。だから、どんなに過酷な状況に陥ろうが、けしては気持ちだけは負けないでください。諦めない心、それが絶望を払拭し、閉ざされた活路を切り開いてくれるはずです』

諦めない心。その言葉が、卑屈になって勝負を投げ捨てようとする自分を支えていた。

『いくら鈴が代表候補生で、駆る専用機が強力でも、俺の勝機が失われたわけじゃない。だから、俺は諦めない。俺が諦める時は、試合に負けた時だけだ』と。

そして、その気構えが、心に余裕を作り、沈着で柔軟な思考を生み出していた。

「よく耐えるじゃない。この衝撃砲《龍咆》相手に。でも、あとどれくらいもつかしらね!!」

鈴の言葉と共に降り注がれる不可視の砲弾。

俺はハイパーセンサーから得られる僅かな空間歪の情報で、衝撃砲を躲し続ける。

「でも、降参なんてしないでよ？あたしはまだ戦い足りないんだから!!」

尚も逆鱗にふれた龍の如く、容赦ない衝撃砲の雨が俺へと放たれる。

俺はその砲弾の間を縫うように、すり抜けながら回避する。そこで俺は、ある事に気付いた。

（衝撃砲の照準が甘くなってきた？）

心成しか、中盤に入ってから衝撃砲をかわすのが楽になってきた気がするのだ。

俺はそう思い、〈白式〉の損傷記録ダメージ・ログで、衝撃砲による被弾率を確認する。すると、序盤と中盤では、明らかに中盤の方が低くなっていた。

これはどういう事か。鈴が遊んでいるのか。それとも俺の技量が向上しているのか。

俺はその真意を確かめるべく、鈴の表情を観察する。

鈴は俺との実力差を悟ってか、勝利を信じて疑わない
余裕綽々
の顔をしていた。

もしかしたら、己の勝利を確信するあまり警戒心が緩み、無意識に操縦が粗末になってきているのかもしれない。きっと、その影響が《龍咆》の照準に現れてきているのだろう。

（鈴にスキが生まれている……これはチャンスだ！！）

俺は直感的にそう思った。イグニッションブースト 瞬時加速による奇襲攻撃を見舞うには、今しかない。

慢心は勝利の足許を突き崩す　その事を鈴に知らしめる為、俺
は《雪片弑型》を握り直した。

よし、織斑一夏、ここが正念場だ。いくぞ、白式!!

Yes My Darling!! (はい、私の愛しい旦那様
!!)

俺は頭のどこか遠くで響く声を聞きながら、鈴の甘い攻撃を掻い潜
る。

そして、鈴に一泡吹かせるべく、一呼吸置いてイゲニツションブースト瞬時加速の体制に入
った。

「うおお　!!」

気合を推進力に変え、爆発的な加速を得る。目が眩みそうなGが俺を襲った。

「ぐっ！！」

ISの人体保護機能によりブラックアウトの恐れは無いが、“体感”はどうしようもない。

全身を磨り潰されそうになる感覚に全身が震えそうになるのを、俺は歯を食いしばって耐えた。

そして、めまぐるしく変化する視界の中、俺は鈴を
いや、龍をしかと捉える。
い

「
！
！？
！？」

鈴が何かを喋っているようだが、音速を突破した俺の鼓膜に届く事はない。だが、言っていることは大体解った。鈴は、俺とアリスがイグニッションブースト
瞬時加速習得に向けて訓練していた事を知らない。大方「うそっ！瞬時加速！？なんでそんな高等術をあんたが使えるのよ！？」ってところだろう。

悪いな、鈴。俺には最強の戦乙女と勝利の女神が味方してくれているんだ。

だから、俺はそう簡単に
負けらんねえんだよ！！

「このぉっ……！」

鈴は咄嗟に《龍咆》を俺に向ける。だが、俺は臆することなく迫撃した。

俺も無駄に逃げ回っていたわけじゃない。《龍咆》の引き金を絞つてから発射されるまでのタイムラグは既に把握済みだ。

《龍咆》の空気圧縮チャージが完了するまでにかかる時間は、最短で約0.6秒弱。

短くはあるが、加速状態にある俺には十分な時間だ。それだけあれば、鈴の懐へ潜り込める。

更にウエイトのある《龍咆》を迎撃に選択するという凡ミスに、鈴の動揺の度合いが窺い知れた。

「はああ　　! !」

俺は、胸に勝利の確信を秘め、《雪片式型》で<甲龍>を斬り伏せる。

同時に、鈴に残された最後の防衛手段シールドバリアが主を守ろうと動く。

でも、そのシールドバリアも　　《雪片式型》には通じない。

俺の太刀筋は、容赦なく<甲龍>のシールドバリアを引き裂いていく。

これで《絶対防御》が働いてか囁いた。

その時、誰

では、諸君、創めようか。

その直後だ。俺たちの頭上より、赤い閃光が降り注いだ。

何だ、あれは!?

いや、考えている暇などない。俺の中の生存本能が『よける』と警鐘を鳴らしている。

「くっ!」

俺は攻撃を諦め、スラスト・リバーサー逆推進装置で咄嗟にその場から後退する。

刹那、正体不明の赤い閃光は、俺の居たところを掠め、アリーナに

大きな窪みを穿った。

「何だ、今の……」

もしかして鈴の奥の手か？いや、違うな、鈴自身も驚愕している。

なら、先の攻撃は一体……。

怪訝顔で攻撃が行われた方角に目を遣ると、目線の先に人影らしきものが見えた。

しかも、その人影は遙か上空 アリーナの遮断シールドより高い位置にいた。

もしかして、アイツがアリーナの遮断シールドを突き破って、俺たちに攻撃を？

学園外部からのシールド破壊および攻撃。これが意味するものは

敵襲か！？

すると、黒い人影が自ら開けたシールドの穴からスゥーとアリーナの中央へと降りてきた。

「やっぱりISか」

アリーナの遮断シールドを破るなんて荒業、可能なのは最強の兵器ISぐらいだからな。

でも、その姿はあまりにもISというモノから懸け離れていた。

腕部は異常に長く、直立の状態でも手が地面についている。おまけ

に丸太のような太さがあつた。そして、胴体は肩と頭が一体化しており、およそ首と呼べる部位がない。更に身体のいたるところにセンサーレンズが備え付けられており、それは日本の妖怪『百目』を彷彿させた。

そして、極めつけが全身装甲フルスキムの操縦者。ISは防御能力が特化している為、本来操縦者自身が装甲を纏う事はない。突き詰めれば、全身装甲のスーツが存在しない訳ではないが、目の前のISのような間接部まで装甲に覆われたISスーツは存在しないハズだ。

< IS情報：ライブラリーと一致する機体はありません >
< IS詳細：コアナンバー不明、無所不明、味方用識別信号無し >
< 警告：未確認機と断定 >

やっぱり、所属不明のISか。でも、何が目的でこんな事を……

そこで鈴から俺へ個人秘匿通信プライベートチャネルが飛んできた。

『一夏、試合は中止よ、今直ぐピットに戻って！』

そりゃそうだよな、正体不明のISに襲撃されたんだ。試合どころではないだろう。

「お前はどつする？」

『あたしは残って時間を稼ぐわ。あんたはその間に逃げなさいよ』

「逃げろって……女を置いて、一人逃げられるか！」

『馬鹿！あなたの方が弱いんだから、しかたないでしょ！』

そう言われるとぐうの音もでない。

でも、せっかく再会した幼馴染を危険に晒すなんて、俺にはできない。

俺が食い下がろうとすると、鈴が投影ディスプレイ越しに微笑んだ。

『大丈夫、私強いから。それに私だって最後まで戦うつもりなんてないから』

俺を心配させまいと、気を遣ってくれる鈴。でもな、鈴

< 警告：アンノーンにロックされました >

どつちやら、相手は俺をどこ指名のようだぜ？

< 警告：アンノーンの出力上昇を確認 >

なるほど、向こうは準備万端って訳か。

「来るぞー！ー！」

俺はスラスターを噴かし、野太い光の束をやり過す。直ぐ真横を赤い閃光が駆け抜けていった。

「ビーム兵器か。しかも出力だけならセシリアのISより上か？」

ざっと見た限り、武装は両腕と両肩にビーム砲が一門ずつの計四門。威力はアリーナの遮断シールドを穿つぐらいだから、少なくとも見積もっても戦艦を沈めるだけの出力はあるだろう。喰らった時の事を想像すると肝が冷えそうだ。

「鈴、コイツの火力は」

「言われなくても、解っているわよ！！あんだこそ、当たるんじゃないわよ！！」

『織斑君、鳳さん、相手は軍用のISのようです。応戦しないで、今すぐアリーナから脱出してください。今直ぐ先生たちがISで制圧に向かいますから』

俺たちが攻撃の回避に専念していると、山田先生が公開通信で介入してきた。

その声音には普段から想像もできない威厳があったが、俺は負けじと言い返す。

「なら、先生たちが来るまでの間、俺たちがアイツを食い止めます」理由は分からないが、単独でIS学園を襲撃してくるなんて、正気の沙汰ではない。

それにあの傍若無人な振る舞い方。そこに政略や軍略の意図があるとは思えない。

だとすれば狙いは一つ 『破壊』だ。なら、一瞬でも野放しにできない。

最悪、止める事が叶わなくても、生徒たちが無事避難できるまでの時間は稼がないと。

「いいな？鈴」

「当たり前じゃない。あんな物騒なヤツ放っておけないでしょ？」

俺と鈴は互いの顔を見合い、力強く頷く。それに悲鳴を上げたのは山田先生だった。

『ちょっと、織斑君、鳳さん！！ダメです、いけません！！もし、生徒さんに何かあったら 』

そこで未確認ISの野太いビームが、俺たちと山田先生の会話を遮るように、割り入ってきた。どうやら、乗っている操縦者はあまり気が長い方ではないらしい。

「一夏、あたしが衝撃砲で援護するから突っ込みなさい。武器それしかないんでしょ？」

「ああ、その通りだ」

隠す必要もないので肯定する。そして、俺たちは二人並び、揃って獲物を値踏みした。

火力は戦艦クラス。エネルギー残量は未知数。相手にとっては不足なし。

俺と鈴は《雪片弐型》と《双天月牙》の鋒を合わせる。それは無言による俺と鈴の鬨の声。

そして、俺たちは即席のコンビネーションで、飛び出した。

第5話 龍を狩る者 Dragon Slayer (後書き)

自分でも悲しくなるぐらい、原作どおりの展開です。違うところといえば、ちよっと鈴が戦闘凶ぽくなっていたり、一夏が何か色々に変な電波を受信しているぐらいですね。

それにしても、戦闘描写って難しいですね。アイツがこう動いたら、コイツがこう動くって頭の中じゃわかっているんですけど、うまく文章にできない。書けたら書けたらでグダグダ。もっとスマートに文章をまとめられるようになりたいものです。

そして次回でようやくクラス対抗戦は終了です。では、次回もよろしく願います

第七話 異端者を撃て Shoot the heretic (前書き)

前話でスマートに文章をまとめたいと言ってきたながら、今話は14000文字にも達してしまいました。最長です。

それと、犬神毛さんのアドバイスで<Side : >という表記を省きました。視点の切り替わりにご注意ください。

それと、展開の都合により今回はあどがきがありません。では、昭和臭いサブタイトルですが、どうぞ。

第七話 異端者を撃て Shoot the heretic

「織斑君、鳳さん、聞こえますか？ 応答してください！ 織斑君！！
鳳さん！！！」

副担任の山田真耶は、途轍もなく焦った表情で、何度もコンソール画面に向かって呼びかけた。

しかし、音信不通になったコンソール画面はうんともすんとも言わない。意図的に通信を切っているのか、それとも何者かのジャミングか。どちらにしろ、真耶は青褪めるしかなかった。

「もう、何で言う事聞いてきてくれないんですか！ これは模擬戦でも試合でもないんですよ」

そう、これは模擬戦でも試合ではない、死が伴う実戦なのだ。泣こうが、喚こうが、相手がその気なら命の保障など何処にもない。

しかも、相手は『IS学園』というISの総本山に単機で乗り込んでくるような狂人だ。真つ当な神経の持ち主とは思えない。その事実が、いつそう真耶の不安に拍車をかけていた。

「まあ、彼らの言う事も一理あるだろう。やさせてやってもいいのではないか？」

取り乱す真耶を宥めたのは、黒いスーツをまとった女性
千冬
であった。

「織斑先生、何呑気な事を言っているんですか！！相手はどう見たって軍用のISですよ。いくら二人掛かりでも手に負えるわけがありませんよ！！それに、もし二人に何かあれば……」

「少し落ち着け。コーヒーでも飲んだらどうだ？糖分が足りないからイライラするんだ」

「あの、先生、それ塩ですけど……」

千冬はコーヒーを片手に、握っていたスプーンをピタと止めた。そしてマジマジと容器を見つめる。そこにはでかかどと活字書体で『お塩』と書かれていた。

「……………」

「あっ！やっぱり織斑先生も弟さんの事が心配なんですね。だから、そんなうっかりを……」

「……………」

イヤな沈黙。本当にイヤな沈黙だった。

真耶は地雷を踏んだ事に気付き、必死になって弁解の言葉を探した。

「あ、あのですね……」

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

「え？あの、それ塩が入っているやつですよね？」

「どうぞ」

千冬はまるで何事もなかったかのように、でも、有無を言わさぬ威圧を込めて、塩コーヒーをズズッと真耶へ勧める。なんとというパワーハラスメントだろうか、と真耶は思った。

しかし、ここはもう受け取る他に道はないのだろうか？否。真耶は思い切って発言した。

「織斑先生、そのコーヒーはちょっと」

さっさ、さっさ　千冬がコーヒーに塩を加える音

「わかりました！！飲みます！！飲みますから、それ以上お塩を入れないでください！！」

これ以上塩を入れられたら、生命に関わる。真耶は観念して渋々塩コーヒーを受け取った。

「……………い、頂きます」

真耶は一瞬、『お手洗いと見せかけて、このコーヒーをトイレに流そうか』と考えたが、そんな小細工が通用する相手ではないと悟り、仕方なく塩コーヒーを啜った。

「……………」

一日の塩分摂取量は10gが適量と言われるが、少なくともそのコーヒーには5日分は入っていた。さらにコーヒーの苦味と塩の辛味

が見事に衝突しており、表現に困る味わいであった。

「山田先生、お味は？」

「お口の中で、コーヒーの苦味と塩の辛味が核戦争しています」

「そうか。なら、もっとよく味わうといい」

この時、真耶は『あ、この人、私の味覚を殺す気だな』とそこそこ真剣に思った。

(でも、織斑先生があんな失敗をするなんて、やっぱり心配なんですよね、織斑君の事が)

真耶は不味いコーヒーを舌鼓しながら、訝しい顔で塩の容器を睨む千冬を見る。

当然といえば当然の事だ。今“戦場”で戦っているのは、タダの生徒ではない。血を分けた肉親　　実の弟である。心配するなという方が無理な話だ。

(でも、顔に出さないのは職務を真つ当しようとしているから)

上官の動揺は、下士官に必要以上の不安を与える。そして、その不安感は組織への不信感に繋がり、やがて組織そのものが瓦解してしまふ恐れがある。だから、上の者はいかなる事態に陥っても、決して心を乱さず、冷静に徹しないといけない。これは指揮を執る者の基本だ。

なのに、自分ときたらアガリ症な上、ここぞという時に力を発揮で

きない。ISの技術こそ在れど、メンタルの強さは人並み以下だった。

（私はまだまだだなあ。少しは織斑先生を見習わないと）

真耶が気を持ち直すと、そこへ勇ましく出撃を申し出る者がいた。イギリスの代表候補生セシリア・オルコットである。

「先生、わたくしにISの使用許可を！すぐ出撃できますわ」

「そうしたいところだが、これを見る」

千冬はコンソールを何度か叩いて、アリーナの現状を示す数値を表示させる。

そのステータスを見て、セシリアは度肝を抜かれた。

「アリーナの遮断シールドが >Level 4 < に設定？しかも、扉が全てロックされているですって！！これは一体どういう事ですか！？」

襲撃を受けているのだから、シールドの強度が最高レベルに設定される理由は解る。こうして置けば、アリーナからの攻撃が施設へ及ぶことはない。まあ、逆も然りなのだが、それはいい。

問題なのは、全ての通路がロックされている事だ。これでは生徒が避難する事も叶わない。いくら何でもこの対応は妙だ。

聡明な彼女は、直ぐにこの事態の原因に気付いた。

「もしかして、学園のシステムが何者かにハッキングされていますの!?!」

「そういう事だ。学内施設の制御システムが何者かの手に堕ちた。システムを奪還できない限り、私たちは、アイツらを救出しに行く事も、援軍として加勢する事も叶わない」

声を荒げるセシリアに、千冬は毅然とした態度で告げる。でも、手は苛立ちを表すように忙しなくパネルを叩いていた。

「でしたら、緊急事態として政府に助勢を!!」

それに答えたのは、画面に向かってキーボードを打ち込んでいた真耶だった

「それなんですけど、どうやら強力な電磁妨害ジャミングを受けているようで、学内の通信手段のほとんどが無力化されています。なんとか政府とコンタクトできるよう試みっていますが、難しいかと」

「では、早くシステムを奪還して、遮断シールドの解除と通路・通信の確保を!!」

「やっている。今も三年の精鋭がシステムハックを実行中だ。システムを奪還でき次第、直ちに部隊を送り込む。理解できたらなら、大人しくしている。ウロチヨロされると邪魔だ」

現状で打てる手は全て打っている、という事なのだろう。最早セシリアに反論の術はなかった。

彼女は額を押さえながら脱力し、ヨロヨロとベンチに座り込む。

まさに、今の自分たちは“鳥籠のカナリア”であった。外敵には襲われぬが、大空は自由に羽ばたけない。

「はあ……ただ待っている事しかできないなんて」

大事な想い人が戦地で危機に陥っているかと思うと、気が気ではなかった。そこへ自分の無力感が加われば、彼女の心労は計り知れないものだろう。

そこでセシリアは、気を紛らわせる事を兼ね、同じ心境であるだろう恋敵の姿を探した。

「篝さん？」

しかし、室内を見渡すもポニーテールが似合う女の子の姿はどこにもなかった。

外へ続くアリーナの通路は、襲撃から避難してきた生徒で犇めき合っていた。

幸い、怪我人はいないようだったが、彼女たちの表情は一樣に暗い。口数も少なく、『大丈夫？』『うん、大丈夫』という互いを励まし合う声ぐらいしか聞こえてこなかった。あとは

「どうして、どうして開かないの！！」

「お願い！！誰かここから出して！！」

「イヤっ！私こんな所で死にたくないよお！！」

恐怖に駆られた少女のたちの、悲鳴染みた叫びぐらいだ。

私が声のする方に視線をやると、女子生徒たちが閉ざされた扉を必死で決じ開けようとしていた。

しかし、施設内のシステムがダウンしているらしく、堅く閉ざされたタングステン製の電子扉はまるでびくともしない。

「もう、ヤダよ、こんなの……出して、お願いだから……」

やがて、生徒の一人が恐怖に心を折られ、その場に泣き崩れてしまった。

無理もない。襲撃を受け、こんな所で缶詰状態にされれば、泣きたくもなるだろう。

私はそんな彼女の許へ歩み寄り、膝を折って視線を合わせた。

「大丈夫ですよ。今頃、織斑先生たちが救出に尽力しているはずですから。もう少し辛抱すれば、直に助けが来ます。怖いと思います
が、今はがんばって耐えましょう。ね？」

私はハンカチでその娘の涙を拭い、手を力強く握って励ます。

すると、その少女は泣くのをやめて、弱弱しくも頷いた。

「ヒック、ヒック……うん。あたし、がんばる……」

私は『いい娘です』と頭を撫で、その少女の友人らしき人物に彼女を任して、その場を離れる。

（あの娘の手前、ああは言いましたけど、実際のところ、救助の見込みは薄そうですね……）

施設のシステムがダウンしている状況から察するに、状況はかなり切迫していると見ていいだろう。

なにより、私の研ぎ澄まされた兵士としての五感が”危機”を強く感じ取っていた。

私もそろそろ、普通の生徒をやめて、何か行動を起こした方がいいかもしれない。

そうするにあたって、まず欲しいものは詳細な情報だ。

そこで、私は持ってきていたモバイル端末を起動し、エイダに通信を繋いだ。

『アリス、どうしたの？ いや、どうしたって聞くのは野暮ね。

何が聞きたい？』

さすが元＜M I 6＞エージェント。状況の呑み込みも、対応も早い。

「施設内の状況と外の情報が欲しいです」

『了解。簡潔に言えば、かなり深刻な状態よ。施設内のシステムが

何者かに乗っ取られてしまって、まったく機能していないわ』

「なるほど。その所為でこの有様なのですか。で、外の方は？例のISはどうなっています？」

『織斑と凰が交戦して、避難の時間を稼いでくれているみたい。アタシたち教師陣も出撃の準備を整えているけど、遮断シールドをLevel4<に変更してしまったから、援軍には迎えそうにないわ。情けない話だけど、今は織斑と凰だけが頼みの綱ね』

一夏と鈴が未確認のISと戦っている。しかも、孤立無援の状態で……

私の脳裏に一抹の不安が過ぎる。だが、私はそれを払拭するように赤毛を振り乱した。

自分が今はやるべき事は、彼らの身を案じることじゃない。この状況を把握する事だ

「それで学園はどのような対応を？」

『三年のエンジニアと教員たちが総掛かりでシステムの奪還を図ってはいるけど、学内発電所まで向こうの手に堕ちているようですね、まともな電力が確保できないているのよ。なんとか臨時用の補助発電機で対応しているけど、如何せんパワーが違うわ。復旧には時間が掛かりそうよ』

「学園は政府に助勢を出していないのですか？」

『それが、大規模で電磁妨害を受けているみたいで、ほとんどの通

信が使用不可状態。精々、学園内部同士で通信するのが限界で、政府に助勢を要請するのも無理そうだわ』

それを聞き、私は小さく舌打ちした。

学園が政府に助勢を要請できないという事は、私たちもくデオス・エクス・マキナ>本部に応援を要請できないという事だ。どうやらこの事態は私たちの力で収束させないといけないらしい。

『それにしても、世界的重要施設であるIS学園のセキュリティを破り、あまつや通信を根こそぎ無力化できる組織なんて、そうないわ、一体どこの組織がこんな事を?』

私は『そうですね……』と首肯しながら、情報を頭の中で整理しつつ考察する。

世界的重要施設であるIS学園のセキュリティを破るには、相当腕の立つハッカーでないと無理だ。それに相当パワーのあるコンピュータも必要になってくる。加え、学園の通信システムを完全に無力化できる組織など、おそらく米軍ぐらいのものだ。

最初は、破滅主義のテロリストが自爆覚悟で特攻してきただけかと思っていたが、この周到さを見る限り、敵は単独犯ではなく、黒幕に大きな組織がいると見ていいだろう。

だとしたら、目的はなんだ? IS学園を襲撃して、なんの旨みがある? そんな事しても世界の反感を買っただけだというのに……なら、
仮に

いや、考えるのは、もうよそう。何にせよ、私が取るべき行動はす

でに決まっている。

「エイダ、私は行きます。相手が何者であろうと、このまま一夏たちをやらせるわけにはいきません」

私の脳裏に、一夏たちと過ごした日々が走馬灯のように蘇っては、儚く消えていく。

そんな二人の笑顔を訳のわからない連中に奪わせるわけにはいかない。 いかないのだ、絶対。

『いいの？そんな単独行動を取って。貴女の役目は密偵でしょ。この学園を守る事じゃないわ』

「確かに、その通りです。それに私は彼女たちを救う義理も恩もない。でも、友人を黙って見殺しにできるほど、私はクールじゃないのです」

私情に流されて任務を忘れる者は、兵士として三流だ。

でも、生憎、私は三流の兵士なのだ。だから、任務を履行するだけの機械にはなれない。

『ふふ、意外と熱いのね。お姉さん、そういう娘、嫌いじゃないわ。で、どうするの？>Level2<までなら、第三世代型ISの火力で何とか看破できるけど、>Level4<ともなれば。現行ISで突破するのは、無理よ？』

その時、待機形態にあった赤騎士が、私たちの会話に割り込んできた。

《心配はない。私はアリスの騎士。活路は私が切り開く。その為の私だ》

＜レッドクイーン＞がAIとは思えない力強い言葉でそう告げてくる。

『わかったわ。事後処理はアタシがうまくやってあげるから、思存分暴れてきなさい』

と、エイダが蒼い瞳でパチッとウィンクした。その姿はまさに頼れる姉貴分だ。

「では、お願いします」

私は踵を返し、常夜の闇のような通路を駆け出す　友を助けるために。

未確認IS＜ゴレム＞　便宜を図るためそう仮名した　との戦いは苛烈を極めていた。

敵から放たれるビーム兵器を凌ぎ、鈴が衝撃砲で相手を牽制しながら、俺が《雪片式型》のバリアー無効化攻撃を見舞う。そういった攻防をもつ三回繰り返し返していた。

「くそっ！あたらねえ……」

4回目となる奇襲攻撃の失敗に悪態をつく、その後ろで鈴が焦れたような野次を飛ばしてきた。

「ちょっと、ちゃんと当てなさいよ。何回目だと思ってるのよ!」

「うるさいな。ちゃんと狙って　「一夏、前!前!」」

鈴に注意を促され、俺はスラスターを逆噴射。バックステップでその場から飛び退く。

直後、カウンターのビーム砲が俺を掠めていった。あぶねえ、鈴の声が無かったら直撃だった。

「くそッ。これ以上の追撃は危険か。仕方ねえ」

折角詰めた間合いだが、ここは後退して体制を立て直した方がいいだろう。

しかし、参ったな……。鈴とのコンビネーションが悪い訳じゃないし、攻撃タイミングがズレている訳でもない。なのに、何故か攻撃が当たらない。まるでコンピューターで計算し尽くしたように回避運動と人間離れた反応速度で対応してくる。

流星に不可視の砲弾《龍咆》を見切るのは難しいのか、鈴の攻撃だけは稀に命中していたが、どれも致命的な一撃には及ばず、未だダメージらしいダメージは与えられていない。

比べ、俺たちは確実にエネルギーを消費していた。この分だと、こちらが先にへばりそうだ。

「一夏、これ以上の深追いは危険だわ。ここは一度撤退して作戦を練り直しましょう」

「そうだな。わかった」

俺たちは、エネルギーと体力の消耗を抑えるため、一度アリーナの岩陰に身を潜めた。

そして、〈ステルスモード〉でその存在感を薄め、息を殺しながら状況の整理と対策を講じる。

「なあ、鈴、後エネルギーどれくらい残ってる？」

「210ってところね」

210か。まだ、戦闘継続に支障をきたさないレベルだ。節約すれば、あと半時間はいけるだろう。

対して、俺の〈白式〉はというと、既に60を切っていた。これを物理的に換算すると、『イクニッションブースト瞬時加速と《雪片式型》の併用攻撃』が一回か、『敵ビーム砲の防御』が一回でエネルギーが底をつく。攻防どちらにしても二度目は無い状況だ。

「なあ、鈴。アイツのエネルギー量ってあとどれくらいだと思う？」

「さあ、わからない。見たところ軍用機っぽいし、まだ余裕なんじゃない？少なくともあたしたちの残りエネルギーで機能停止ダウンさせるのは至難よ。よく見積もっても勝率は一桁ってところだわ」

勝気な鈴らしくない、弱々しい声音でそう言う。その気持ちは解らないでもない。

正直、俺もこの状況を乗り切る自信が徐々に薄れつつあった。

だが、アリスの言葉は俺の中でまだ生きている。だから、勝率が一桁だろうと、俺は諦めない。

「鈴、逃げたいなら逃げてもいいぞ。あとは俺が何とかしてやる」

「ばっ！馬鹿にしないでよねっ！あたしは代表候補生よ。尻尾巻いて退散なんて、笑い話にもならないわ」

「そうか。なら、ここにいろ。お前だけは俺が絶対に守ってやる」

女尊だろうが、男尊だろうが、どんな時代になっても、女を守るのが男の使命だ。

それを投げ出したら、男は男じゃなくなる。男である意味さえもない。

すると、鈴は戦闘の真只中である事も忘れ、嬉しそうに頬を赤めた。

「え……あ、うん……ありがとう、一夏」

「礼なんていらねえよ。男が女を守る。当然の事だろ？でも、もしあのISからお前を守り抜いたら、その時は素直に受け取るよ」

結局守り抜けなきゃ何の意味もないからな。何にも達成していないのに、礼を貰うのは変だろ？

そして、有言実行こそが俺の信条だ。何がなんだろうと、鈴だけは守り抜いてみせる。

でも、それを達成するには、まずアイツをどうにかしないとイケないな。

(そういえば、妙だな)

敵の攻略法を探る為、今まで行った攻撃の映像を再生していると、ある妙な事に気が付いた。

それを言葉にするのは難しいのだが、攻撃にしる、防御にしる、アイツは決まって同じ動作、拳動で対応してくるのだ。例えるなら、それはゲームのAIのようで、予め用意しておいた複数の攻撃方法メッセージを状況に合わせて使い分けているだけのように見えるのだ。だから、人間特有の柔軟性が感じられない。

これが、俺が気付いた“妙な事”。

もしかして、<ゴーレム>の操縦者は外部から何かしらの<インプット>を受け取り、状況に適した<アウトプット>を返すだけの機械なんじゃなかるうか。確かそういう装置を工学的に自動人形オートメーションって言うんだっけ？

自動人形か。強ち俺の憶測は外れていなのかもしれない。もしそうなら、操縦者が不自然な全身装甲のスーツを装備している事にも、柔軟性のない機械染みた行動パターンにも、説明がつく。

でも、実質問題、そんなものが有り得るのだろうか。

「なあ、鈴。ISの無人化って可能なのか」

「は？もしかしてアレが無人机だともいうの？そんなの在り得ないわ。ISは人が乗らないと動かない。だって、ISはロボットじゃないよ？」

鈴の意見はもつともだ。ISはロボットではなくパワードスーツ身に纏うものだ。

人が装備して指示を出してやらなければ、まともに動くことすら俾ならない。

「ISの無人化なんて在り得ない。ISは人が乗らないと絶対動かない。そういうモノだもの」

でも、そういう固定観念に囚われてはいけない。科学は日々進歩するものだから。

だから、俺は言う。

「じゃあさ。人間の代役を勤められるロボットがいるとしたら、どうだ？」

俺の言葉に、鈴はハツとした。

俺の推測だと、〈ゴレム〉には人間の代役を勤められる自動人形という装置　　おそらく全身装甲の操縦者がそうだろう　　が積まれていて、その装置が〈ゴレム〉を操っているとと思うのだ。そうする事で、ISの無人化を実現している。

俺はバカだから、どうやれば実現できるなんて説明はできないけど、可能性は否めないと思う。

「そう言えば、本国にいる時、そういう装置が極秘で開発されているって話を聞いた事があるわ。でも、仮にその装置が完成していて、あれが無人だったとしても、どうしようもないでしょ？」

鈴の疑問に俺は静かに答える。

本当の“切り札”にして
の技名を。

世界に一つしかない唯一無二

「《零落白夜》」

「《零落白夜》？何それ？」

「この《雪片弑型》の全力攻撃の名前だ。実はこの《雪片弑型》の能力は高すぎて、最悪《絶対防衛》ですら突破して、相手を死に至らしめる危険があるんだ。だから、模擬戦や学内対戦では使用できないけど」

そこで俺は不敵に笑う。

「相手が無人機なら容赦する必要はないだろ？」

《零落白夜》には一撃必殺の威力があるから、相手の命まで奪いかねない。だから、今まで使用を控えていたが、相手が無人なら手加減をしてやる必要はない。

「でもさ、いくら《零落白夜》ってのが強力でも、当たんなきや意味ないでしょうが」

「イゲニッションブースト
瞬時加速を使った奇襲攻撃で相手の意表を突けば、いけるはずだ」

「確かに、それなら多少は勝機があるかもしれないわね。でも、エネルギー足りんの？ただでさえ、その《雪片式型》のバリアー無効化攻撃はエネルギーの消費が大きいでしょ？それより強力な能力を
使いながら、イグニッションブースト瞬時加速を併用するなんて消耗が激しいなんて話じゃ
済まないわよ？」

「あつ」

そこで俺は、重大な見落としに気付いた……

<白式>の残りエネルギーは60。これは丁度《零落白夜》一回分に相当する。なので、《零落白夜》を使用すれば、それだけで残りのエネルギーを全て使い切ってしまうのである。

つまり、エネルギー残量60では、《雪片式型》とイグニッションブースト瞬時加速の併用攻撃はできても、《零落白夜》とイグニッションブースト瞬時加速の併用攻撃は使用できないという事だ。

俺はその事に気付いていなかった。うわ、カッコつけてドヤ顔した自分が恥ずかしい……

「このバカ！！アホ！！ドジ！！マヌケ！！スカタン！！小学生からやり直せ！！」

「そんなに怒るなよ。誰だって、これぐらいの勘違いは　いや、
待て、策ならあるぞ」

そこで、俺の脳内に突拍子もない作戦が思い浮かんだ。そう、孔明も驚く、突拍子もない作戦が。

「大丈夫なの。その策つての？」

先の一件からか、鈴が疑わしい眼差しで俺を見てくる。だが、俺は今度こそ確信を持って頷いた。

「分かったわ。どうせこのままだとギリ貧になるだけだし、あんたの作戦に乗ってあげる。その代わり失敗したら@クルーズのクレール奢りなさいよ、一番高いやつ」

フフフと邪悪に笑う鈴。うっ。その笑みに何枚の野口さんが犠牲になった事か。

「わかった。じゃあ、鈴はアイツに向けて最大威力の衝撃砲を撃つてくれ」

俺は作戦の全貌を告げず、鈴に果たしてもらいたい役割だけを簡潔に伝える。

「別にいいけど、当たらないわよ？」

「いいんだ。当たらなくても」

「わかったわ。でも、一夏、《龍咆》の最大チャージ中はあんたを援護してあげられないからね」

鈴曰く、最短で《龍咆》を最大チャージするには、均等に割かれているエネルギー配分を一時的に《龍咆》へ集中させる必要があるらしい。当然、その間、シールドバリアーやスラスターに供給されるエネルギー量が減る訳だから、防御力も機動力も低下する、との事

だ。

「最大チャージまで最短でも10秒。その間、無防備になるんだから、しっかり守ってよね」

「おう、任せろ。アイツに指一本触れさせねえよ」

「頼んだわよ、一夏」

鈴は頼もしそうに俺を見て、首肯する。

よし、これで準備は整った。アイツに目にも物を見せてやる！

そして、俺たちは<ステルスモード>を解除して、潜めていた岩陰から飛び出した。

同時に、鈴が最大威力の衝撃砲を発射するため、チャージに取り掛かる。俺は囃役を演じるため、単独で敵へと突貫した。

「おい、木偶ゴレムの坊。こっちだ!!」

敵の注意を鈴から逸らすため、俺は大声を上げながら派手に立ち回る。

そういえば、小学生の頃、鈴が中国人だからという理由でイジメられていた時も、こんな風に大立ち回りをしたっけかな。まさか高校生になった今でも、同じ様な事をするなんてな、思ってもみなかった。ちよつと感慨深いな。

「一夏あ!!!!!!」

俺が敵の注意を引き付けていると、中継室から聞き馴染んだ声が飛んできた。

「あれは箒！？なんで、アイツがここに！？」

ハイパーセンサーでよく見ると、箒は肩で荒々しく息をしていた。

表情には焦燥と不安の二つが入り混じっていて、いつもの剣呑な雰囲気はどこにもない。

もしかして、俺が心配で、わざわざ駆けつけてくれたのか……？我が身の危険を顧みず？

「男なら……そんな敵に勝てなくてなんとする！！お前の、男としての、矜持をみせてみる！！」

搾り出すような大声で箒が叫ぶ。その声は酷く掠れていて聞き取り難かった。

でも、俺の鼓膜にはしっかりと届いていた。箒の激励が、魂の叫びが。

ああ、分かっているぜ、箒。俺はこんなヤツに負けたりはしない。

だから、見ていてくれ。俺がアイツをぶっ飛ばすさまを。

すると、<ゴーレム>の眼を模したアイセンサーが箒を睨んだ。興味を持ったのか、もしくは敵性と判断したのか。

どっちにしろ、このままじゃマズい！箒へ危害が及ぶ前に仕留めね

えと！

「鈴、まだか!?」

「もう少し待って 100!110!120!! 完了
!!!」

< 報告：《龍咆》圧縮度120%：最大出力《神龍の咆哮》発
動可能 >

< 警告：《龍咆》内部に歪を検知。原因：空間の過度圧縮：《
龍咆》使用停止を推奨 >

「甲龍^{シムロン} うつさい!!いくわよ、一夏!!!!」

「おう、やってくれ!!」

そう、指示を出して、俺は鈴の視界を遮るように《龍咆》の射線上
へ躍り出る。

「ちょ、ちょっと、どきなさいよ。これじゃ撃てないじゃない!!」

「いいから撃て!俺を信じろ!!」

「ああもう!!……もうどうなっても知らないんだから!!死んでも
恨まないでよ!!」

業を煮やした鈴が引き金を引く。同時に非固定浮遊部の棘が伸び、
空間に突き刺さった。

おそらくあの棘は、《龍咆》の反動制御を行うための小型PICなのだろう。

そして、今までとは非にならない威力　　発射口そのものが破損するほどの衝撃砲が放たれた。

俺はそれを背中に受け、『イグニッションブースト瞬時加速』を発動する。

瞬時加速の原理はアリス曰く、こうだ。後部スラスタ翼からエネルギーを放出、それを一度内部に取り込み、圧縮して放出する。その際得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する。要するに、外部からのエネルギーでも瞬時加速は行えるのだ。

イグニッションブーストこの仕様を用いれば《零落白夜》に必要なエネルギーを残したまま、イグニッションブースト瞬時加速を使用できる。

エネルギーが無いなら有る所から持って来ればいい。これが、俺が思いついて突拍子もない策。

「ぐおおっ！」

《龍咆》のあまりの威力に意識を持っていかれそうになるが、俺は必死で耐え、加速した。

イグニッションブースト瞬時加速の速度はエネルギー量に比例する。そのため、最大威力の《龍咆》を糧に発動したイグニッションブースト瞬時加速は、まるで世界を置き去りにするような凄まじい速さだった。

「ぐぐっ」

「！！」

予想を遥かに上回る超加速に、全身が悲鳴を上げ、意識が途切れそうになる。

そんな中、俺は《雪片式型》の本来あるべき姿を開放した。

《雪片式型》の刀身が中央から割れ、そこから眩い光を放つ白銀の刃が出現する。それだけではない。まるで火が飛び移るように《雪片式型》の眩い光が<白式>全体を包み込んだ。

そう、これが鞘から解き放たれた《雪片式型》の真の姿だ。

< 報告：エネルギー転換率82%：《零落白夜》発動可能 >

そして、《雪片式型》が真の姿を現した時、《零落白夜》は顕現する。

「うおおおおお !!!」

闘気のような、黄金のオーラを纏いながら俺は吼える。

そして、俺は、俺の真骨頂を發揮した。まるで世界と同化したような五感が僅かな変化を俺に知らせ、極限まで高まった集中力が膨大な情報を的確に処理してくれる。

まるで神の如き全能を得たような高揚。もう負ける気がしない。

すると、<ゴーレム>の動きが恐れ戦いたように静止した。

おそらく、相手が予想外の行動に出たため、コンピューターがそれを処理しきれず、“処理落ち”を起こしたのだろう。まさか味方の

砲撃を糧に特攻してくるとは、さすがのコンピューターも予測できなかったに違いない。想定内の事にしか対応できないのがコンピューターの欠点だ。

当然、俺はその隙を見逃さない。俺は

大切な人を守りたいという願いを、それを貫き通すための強い信念を、

《雪片弑型》にありつたけ詰め込めこんで、渾身の一撃を振るう！！

それは、まるで咎人に断罪を下す神の鉄槌の如く《雪片弑型》の神々しい光刃が<ゴーレム>のシールドバリアーを、自動人形を、易々と斬り裂いた。

「やったか！」

手応えを感じ、俺は《雪片弑型》を鞘に戻し、間合いを取った。

<ゴーレム>はゼンマイの切れたブリキ人形のような動きで、野太い腕を俺に伸ばしてくる。

俺は息を呑んだ
が、<ゴーレム>がそれ以上動く事は
なかった。

<ゴーレム>は弁慶の立ち往生のように、立ったまま沈黙する。

そして、命の灯火が消えていくように<ゴーレム>の目を模したゼンサーレンズの輝きが徐々に失われていった。

「終わった……のか？」

完全に機能停止したところで、俺は改めて目の前のISを凝視する。操縦者役を担っていた自動人形からは、集積回路やコード、血とも似つかないゲル状の液体が零れていた。

どうやら、相手は本当に無人機であったようだ。

確信はあったものの、これには心底安堵した。もし、これが有人機だったとしたら、俺は人を殺した事になる。

(IS ってやっぱり兵器なんだよな)

相手の無残な惨状を見て、俺は改めてISが兵器 人殺しの道具である事を自覚した。

俺は一度『ISに乗る意味』について考える必要があるかもしれない。

でも、今は

「やったじゃない一夏！惚れ直、じゃなくて見直したわよ」

彼女たちと勝利の美酒に酔いしれよう。

「これも鈴、それと箒のおかげだ」

俺はそう言いながら、鈴を見て、箒に手を振る。

鈴は『そうね、私のおかげね』と嬉しそうに笑い、箒は『よくやった』と何度も頷いていた。

試合はめっちゃくちゃになったけど、これで一段落だな。あとは、先生たちに任せて、俺たちはピットに――

《フライマリーダウン一番機行動不能。フライマリーダウン一番機行動不能。フライマリーダウン一番機行動不能。《不能》

と、生気の籠らない機械的な声が、ISのスピーカーから零れた。

《パージ破棄慣行》

まるで子を産み落とすように、<ゴーレム>からフルスキン全身装甲の自動人形がパージされる。

そして、俺は絶望的な言葉を聞いてしまった。

《セカンダリーアクティブ二番機始動。セカンダリーアクティブ二番機始動。セカンダリーアクティブ二番機始動。セカンダリーアクティブ二番機始動。《》

次の瞬間、棄てられた自動人形と同タイプのものが拡張領域から召還された。

それだけではない。沈黙していたはずのIS本体も、再び息を吹き返したのだ。

俺は血の気の引く音を聞いた。も、もしかして、こいつまだ動けるのか？

いや違う。俺が破壊したのは自動人形という人間擬き、IS本体はほぼ無傷だ。

だから、こいつは まだ動けるのではない まだ戦えるのだ。

「い、一夏……どうしよう。あたしもうエネルギーが……」

鈴が戦意喪失した声音で言う。おそらく先の衝撃砲に全てのエネルギーを注ぎ込んだのだろう。

俺も《零落白夜》の使用で、〈白式〉の形状を維持するだけのエネルギーしか残っていない。

「でも、向こうだって、《零落白夜》を喰らったんだ。《絶対防衛》が働いてエネルギーを大量に消耗したはず。もうまともに戦える

エネルギーなんて残っているわけが

いや、待て。人体を守る為の《絶対防御》を無人機に搭載する必要はあるだろうか？

それは心臓の無い者にピースメイカーを植え付けるような行為だ。なら、最初から《絶対防御》など積まれていなかったと考えるのが妥当。だとしたら、《絶対防御》に使用されるはずだったエネルギーが、まだあいつの中に残っているという事になる。

くそっ、最悪だ……。機体は無傷。エネルギーもまだ残っているなんて!!!

《絶対防御》の有無。自動人形のスペア。俺は完全に見誤ってしまった。

「一夏あ!!!逃げろお!!!」

筈の切羽詰まった声が俺に届く。でも、俺はそんな気になれなかった。

悪い筈。俺にはやらなければならない事がある。

この事態は《零落白夜》が当たれば勝てると思った俺の責任。だから

俺を信じてくれた鈴だけは、命に代えても守らないといけない。

「鈴、お前はなんとかして逃げる。ここは俺が命にかえて時間を稼ぐから」

輝きを失った《雪片式型》を構え、俺は絶望的な戦いに赴く。

すると、鈴は髪を振り乱しながら、蒼白な表情で俺にしがみついてきた。

「そんなのダメ！一夏だけ置いていくなんて、あたしにはできない！」

だが、俺は切実な表情でしがみついてくる鈴を突き放して、言い放った。

「行け、鈴。行ってくれ！！このままじゃ二人ともヤられちゃう！！だから、お前だけでも」

「イヤ！！一夏が残るっていうなら、あたしもココに残る！！だつて」

そこで、時間が止まった。

「あたしは一夏の事が好きだから！！
だから、あんたと一緒にいさせてよ！！」

鈴はそこまで俺の事を想っていてくれていたなんて……でも、俺の決意は固まっていた。

その刹那
俺と鈴の間を裂くように、赤い閃光が放たれた。

俺は咄嗟の出来事に棒立ちする鈴を押し倒して無理矢理押かわさせる。

くそ。どうやら、悠長に庇い合える時間はもう無いらしい。死の刻限が、そこまで迫っていた。

そして、ゆっくり
そう、ゆっくりと<ゴレム>の腕が一本ずつ俺たちに向けられる。

そして、翳された腕の掌低に禍々しい光が帯びた。

エネルギーは底をついている。攻撃を防ぐ手立てはない。逃げる術も
ない。万事休すか。

「あたし、一夏と一緒になら怖くないよ」

そう言って微笑みかけてくれる鈴。その言葉に俺は少し救われた気がした。

俺はその笑みを生涯
いや、死んだ後も忘れないだろう。

「ありがとな、鈴」

俺は<白式>の腕部装甲を解除し、鈴の涙を拭ってやる。それが、俺が鈴にしてやれる最後の優しさだった。

そして、庇うように鈴を強く抱きしめ、やがて訪れるであろう<破滅>を待った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5613x/>

IS<インフィニット・ストラトス> Deus Ex Machina

2011年11月6日02時04分発行